



(1) 高山地区 Aトレンチ全景(上が南西)



(2) 西条地区 下海印寺遺跡調査地全景(合成写真：上が北東)



(1) 下内田地区 縄文時代竪穴建物 S H08 全景(南から)



(2) 調子地区 全景(合成写真：上が東)

2. 京都第二外環状道路関係遺跡 平成24年度発掘調査報告

(1) 長岡京跡右京第1046次(7ANRHK-12地区)

1. はじめに

この調査は、平成24年度一般国道478号京都縦貫自動車道京都第二外環状道路建設事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受けて実施した。

調査地は、長岡京跡の条坊復元では長岡京右京八条三坊六町(新条坊では九条三坊八町)にあたる。調査地の東および南側では、長岡京跡右京第968次調査が実施されており、古代・中世、近世の溝を中心とした遺構が検出されたほか、これらに伴う多くの遺物が出土している。

今回の調査地は、右京第968次調査に隣接する範囲が対象である。調査にあたっては、民家への進入路の確保および南西側の農業用水路の保全のため、調査対象地を3分割して調査区を設定した。

本調査報告で使用した国土座標は、日本測地系第Ⅵ座標系である。現地調査並びに報告については、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会、公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターを始め、関係各機関、地元自治会や近隣住民の方々にご指導とご協力をいただいた。記して感謝します。

なお、調査に係る経費は、全額、国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所が負担した。

〔調査体制等〕

現地調査責任者 調査第2課長 水谷壽克

調査担当者 調査第2課調査第2係長 岩松 保

同調査第2係主任調査員 増田孝彦

調査場所 長岡京市調子2丁目



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

現地調査期間 平成24年7月19日～8月30日

調査面積 200㎡

2. 検出遺構

1) 1トレンチ(第2・3図、図版第1・2)

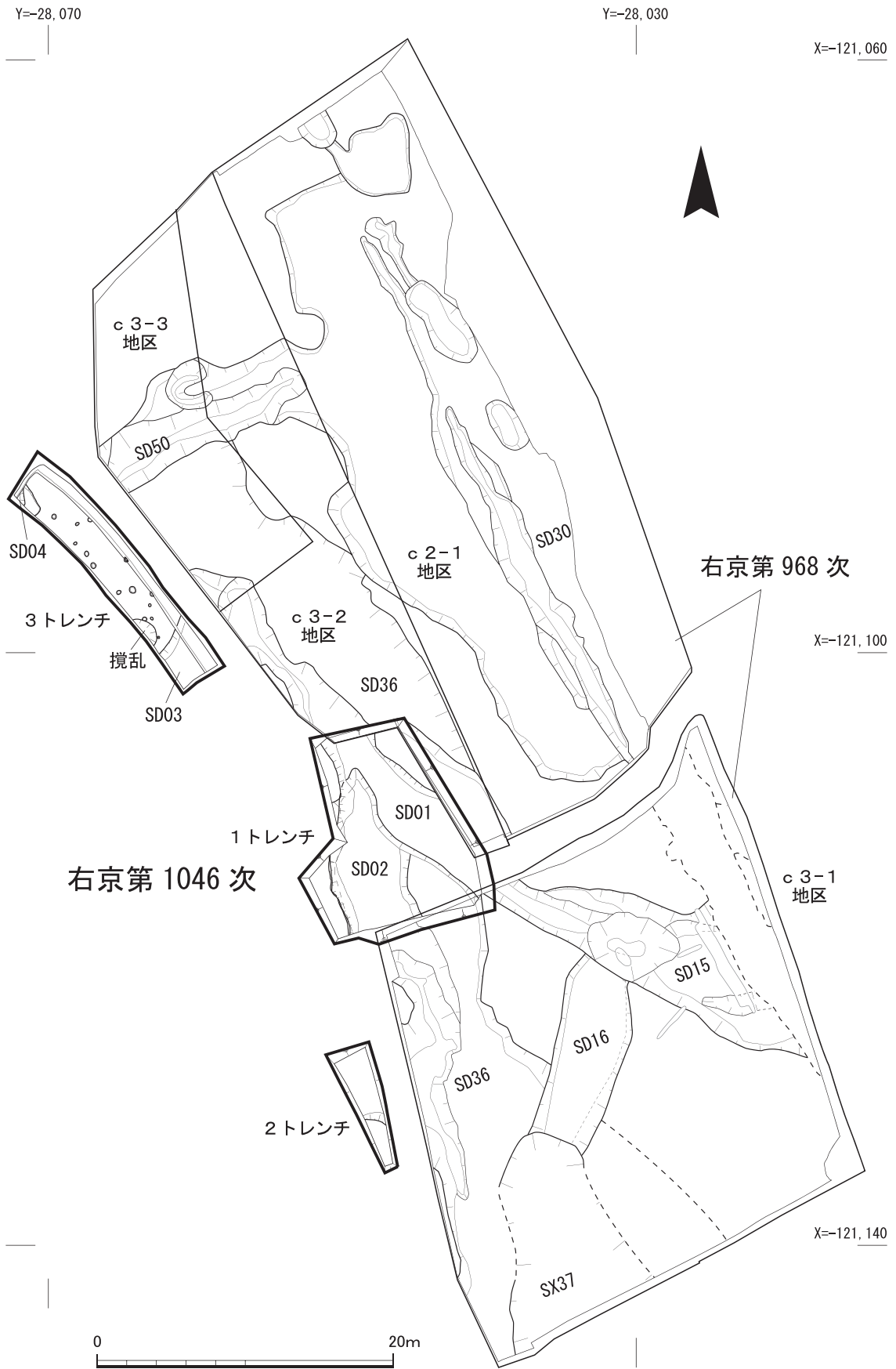
右京第968次調査のc3-1地区とc3-2地区の間に設定した。現代の盛土が約0.7m認められ、その下に旧水田耕作土がある。基本層序は、耕作土の下に灰色粘質土(第5層)の床土が約0.6m堆積しており、その下層ににぶい黄橙色礫混じり砂(第7層)とにぶい橙色礫混じり砂質土(第8層)が、ほぼ水平に堆積する。遺構面は3面確認した。第1面は第6層上面で、南西から北東方向に延びる幅約0.8m、深さ0.2m程の浅い溝を部分的に2条(第10層)ほどを検出した。第2面は第8層上面で、流路SD01の検出面である。第3面は地山である明褐色シルト(第9層)上面である。第3面では流路SD02を検出した。第6層上面で検出した浅い溝(第10層)は、右京第968次調査c3-2・c3-3地区で多数検出された江戸時代の耕作溝群と同じ層位で検出されていることから、その一部と考えられる。

流路SD01 トレンチほぼ全域で検出した流路である。西側の肩部は明瞭であるのに対し、東側は緩い傾斜となっており、トレンチ東壁中央部分より南では明確な肩部を確認できなかった。右京第968次調査c3-1・c3-2地区で検出した流路SD36の肩部につながることから、その一部と考えられる。上流となる北西側ほど幅が狭く南側が大きく開く。検出長12.8m、深さは中央部で0.8mを測る。埋土は上層(第12・15層)が砂質土・礫混じり粘質土で、下層(第17・29・30層)は粘質土を中心とする。古墳時代後期～平安時代中期の遺物が出土した。

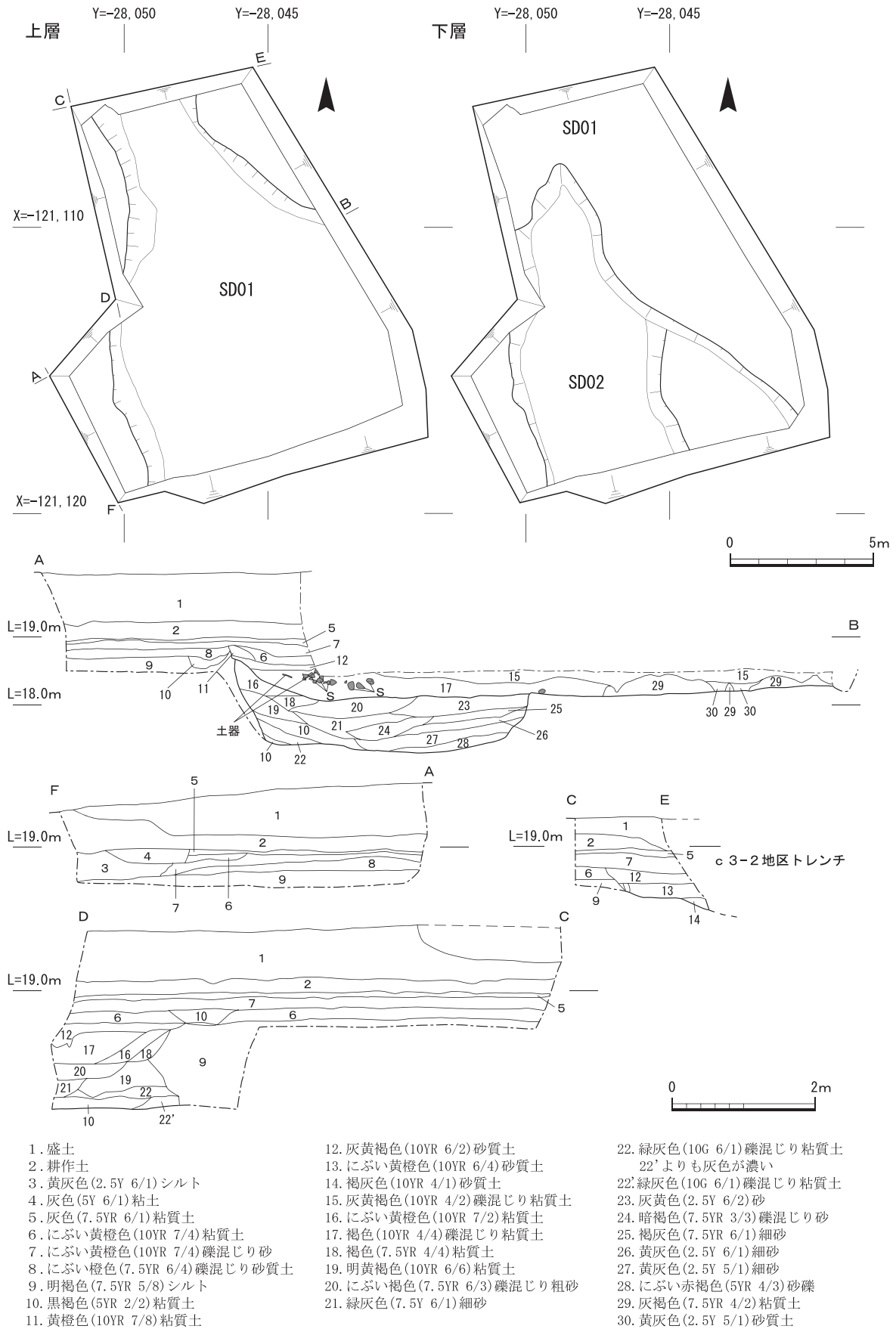
流路SD02 流路SD01の下層で検出した。検出長10.8m、幅3.7m、深さ1.2mを測る。南側のc3-1地区の西壁沿いで検出した流路SD36の最深部北側延長部分の可能性がある。最下層には緑灰色礫混じり(第22・22層)～黒灰色系(第10層)の粘質土が堆積し、上層は粘質土や細砂・砂礫の堆積で、水が流れた後再び滞水したことを示す堆積が2回程度確認できる。第22・22・10層からは遺物は出土しなかった。上層からは、平安時代前期～中期を中心とした遺物が出土した。

2) 2トレンチ(第2・4図、図版第3)

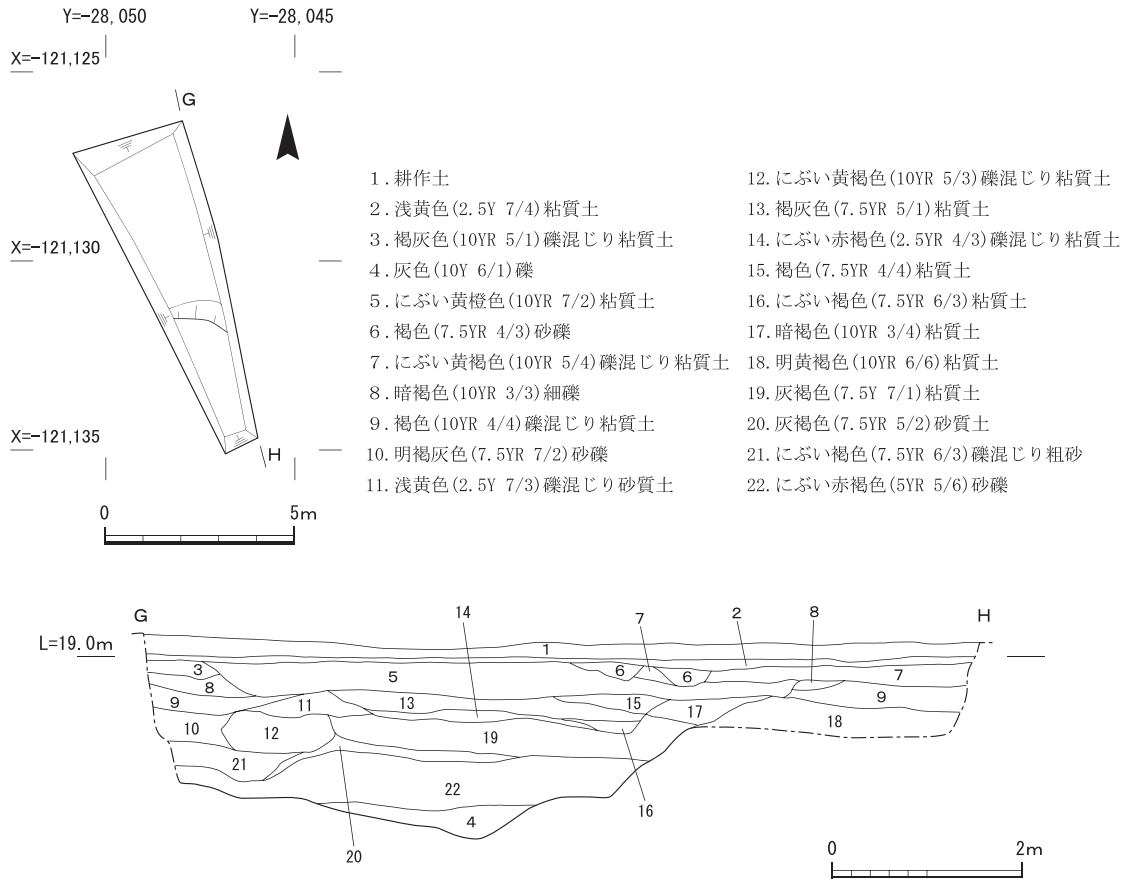
1トレンチの南側、c3-1地区の西側に設定した。現地表面が水田耕作土で、標高は19.1～19.2mである。基本層序は、上から耕作土(第1層)、床土(第2層)、整地土と考えられる水平堆積の礫混じりの粘質土(第3・8・9層)、地山面となる明黄褐色粘質土(第18層)の順であり、第18層上面で流路を検出した。また、整地土には粘質土や砂礫を埋土とする溝(第5～7層)が掘り込まれる。検出遺構は、流路の南肩部のみである。埋土の大半が砂礫の堆積であることや、東側に農業用水路があることから、壁面崩落の危険が生じたため検出面から2.5mまでの掘削にとどめた。流路内の断面観察では、3回程度水が流れたことを示す堆積が確認できた。遺物は出土しなかった。東側のc3-1地区西壁沿いにある流路SD36の一段深くなった部分に通じているも



第2図 調査トレンチ配置図



第3図 1 トレンチ平面・断面図



第4図 2トレンチ平面・断面図

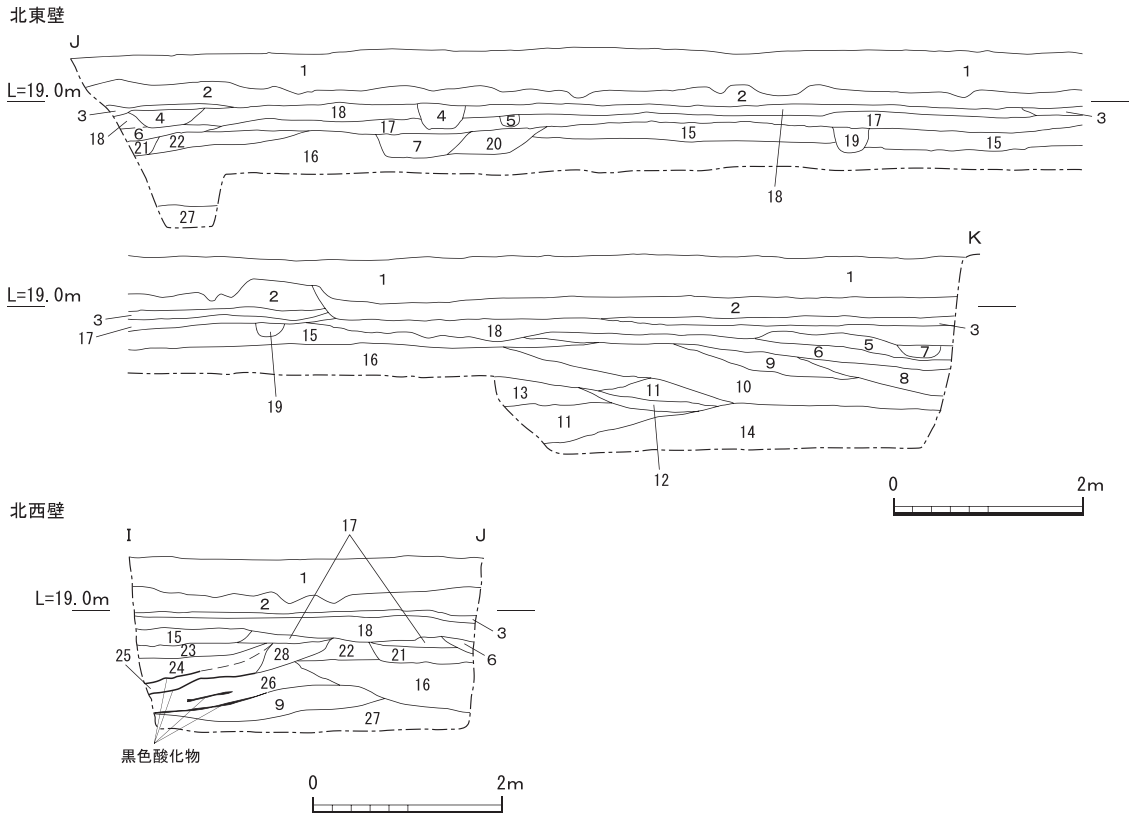
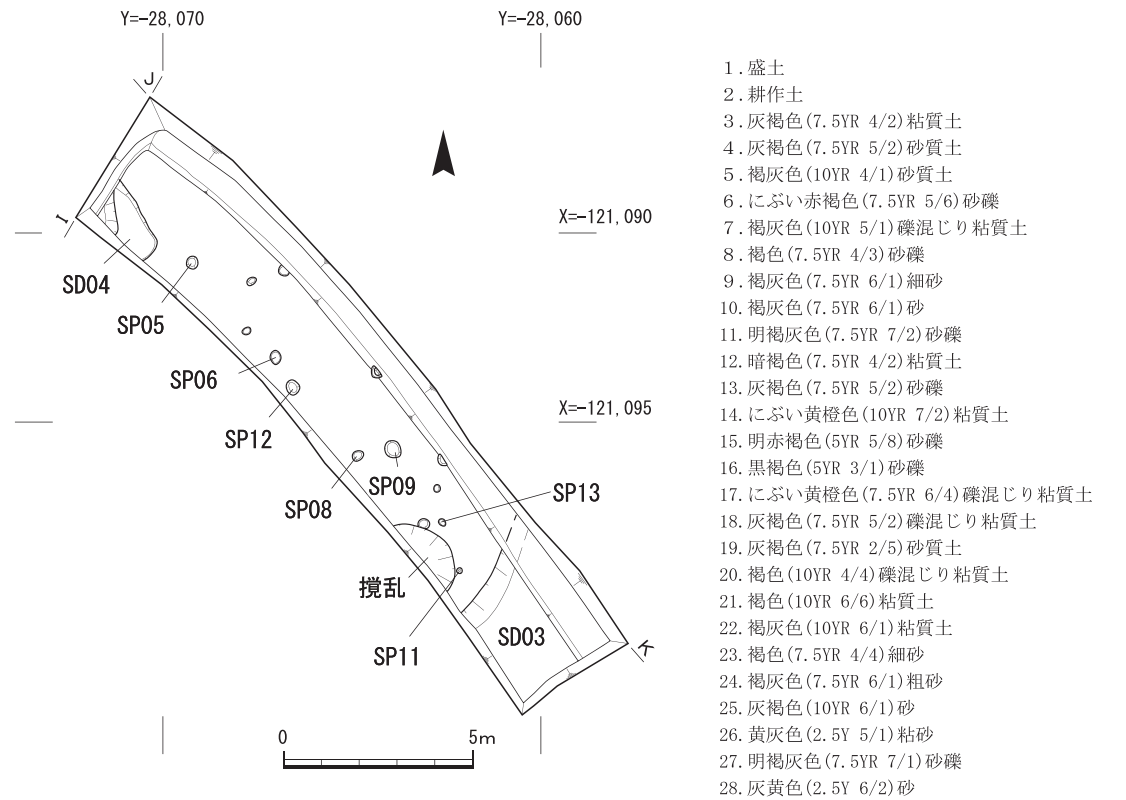
のと判断される。S D36からは平安時代前期～中期の遺物が多量に出土している。

3) 3トレンチ(第2・5図、図版第4・5)

1トレンチの北西側、c 3-3地区の西側に設定した。基本層序は、地表下に現代の盛土が約0.5mあり、その下に約0.2mの耕作土、その下層に灰褐色粘質土の床土(第2層)があり、遺構検出面である黒褐色砂礫(第16層)までは、土地利用に伴う整地土である。第17層上面では1トレンチ同様近世以降の遺構と考えられる柱穴を検出した。この層より下層についてはトレンチ北端で0.75m、南端で1.2m下まで断ち割りを行ったが、砂礫の堆積が続き遺構面は確認できなかった。ただし、南部では遺構検出面より0.6m下の砂礫層中に暗褐色粘質土(第12層)が認められ、この層中より奈良時代後半～平安時代初頭に比定される土師器杯(33)が出土した。また、検出面である黒褐色砂礫中からも須恵器長頸壺の口縁部(31)が出土している。

3トレンチで検出した遺構は、流路2条と柱穴14基である。なお、c 3-3地区で検出されている流路S D50の延長部は確認できなかった。本トレンチの遺構検出面がc 3-3地区と比べて低いことやc 3-2・c 3-3地区の調査でも途中で途切れる流路が見られることから、S D50も3トレンチ間で途切れているものと考えられる。

流路S D03 トレンチ南端で検出した。検出長4.5m、幅2.7m、深さ0.6mを測る。c 3-2地区の流路S D36の延長部と考えられるもので、流路の北肩に相当する。南肩は調査地外になる。今回の成果から、S D36はc 3-2地区北端でほぼ直角に近い形で西に屈曲していると考えられ



第5図 3トレンチ平面・断面図

る。埋土(第5・6・8～10層)は砂・礫を中心とする。土師器片が少量出土した。

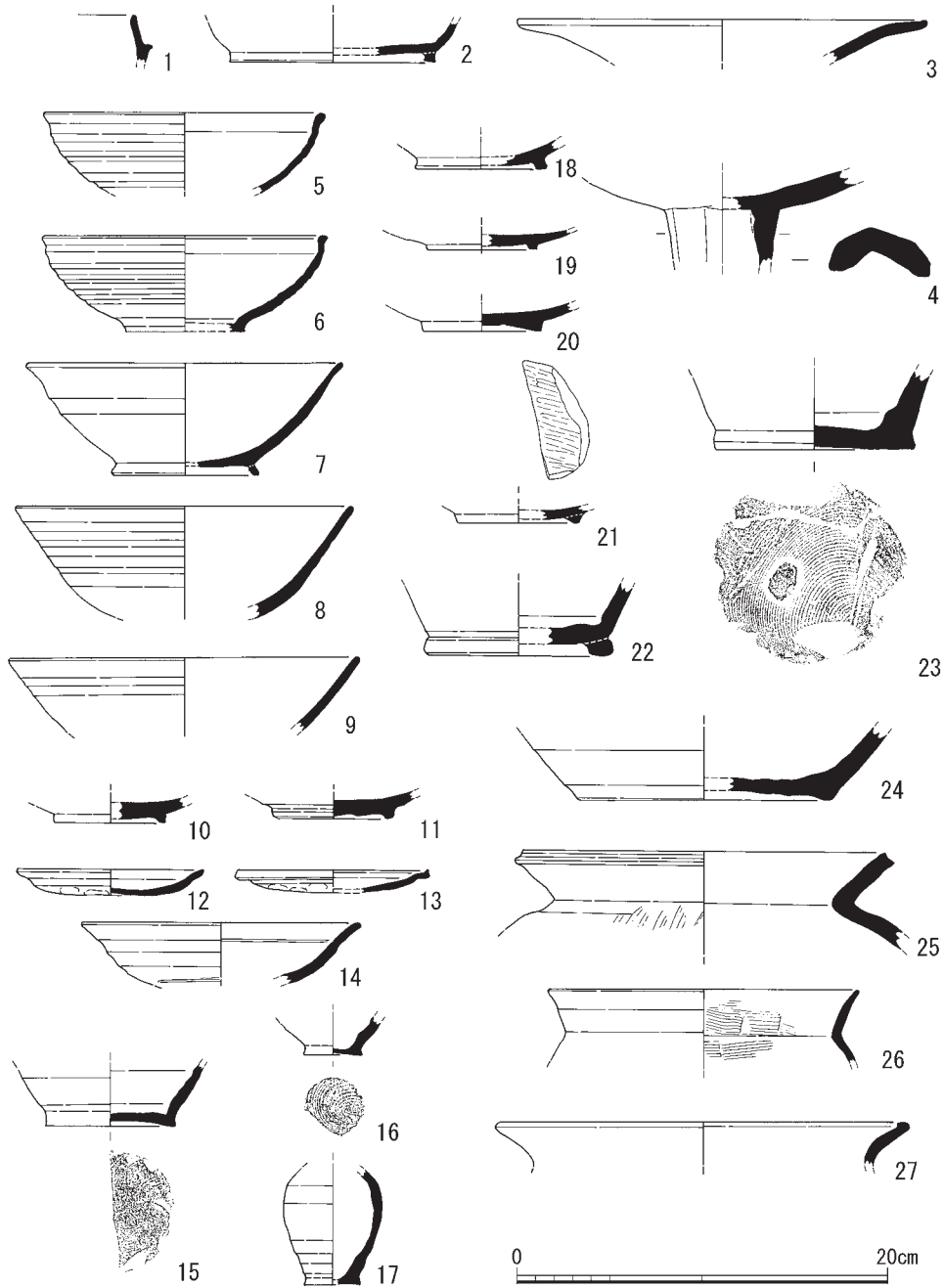
流路S D04 トレンチ北端で検出した。長さ1.7m以上、幅1.3m以上、深さ0.5mを測る。埋土は最下層が灰褐色砂(第25層)で、これより上層には灰褐色粗砂・細砂(第23・24層)が堆積する。土師器甕(38)が出土した。

柱穴S P05・06・08・09・11～13 柱穴は、浅いもの(10cm前後)と深いもの(18cm以上)がある。浅いもの(S P05・13・11及びその周囲)は第17層より掘り込まれており、砂質土を埋土とする溝(第4層)と同じく、近世以降のものと考えられる。深いもの(S P06・08・09・12及び北東側断ち割り溝に切られた3か所)については、流路の検出面(第16層上面)から掘り込まれており、規模は直径0.25～0.4m、深さ0.09～0.18mを測る。建物等は復元できない。埋土中より土師器小片が出土している。

3. 出土遺物

出土遺物の総量は遺物整理箱3箱で、1トレンチS D01と3トレンチで遺構検出の際に出土した遺物が大半を占める。2トレンチでは、遺物は出土しなかった。

1トレンチ出土遺物(第6図、図版第6) 1・3～22・24～27はS D01、2・23はS D02から出土した。1は須恵器杯身である。内外面を回転ナデで仕上げる。口縁部が内傾ぎみに立ち上がる。端部は丸くおさめる。6世紀後半のものである。2は須恵器杯Bである。内外面ともに回転ナデ調整する。底部はヘラ切り後、高台を貼り付ける。口縁部を欠損する。色調は灰色で、焼成は良好である。3・4は土師器高杯である。3は杯部片で、口縁部はやや外反ぎみに開く。口径22.0cmを測る。4は口縁部・裾部を欠損する。脚部の断面が七～八角形になると推測される。脚部は削り抜かれて中空になっており、杯部は別付けで、浅い皿状をなす。胎土は粗く、0.5～1mmの白色・灰色の砂を多く含む。焼成は良好で、色調は浅黄橙色である。奈良時代後半～平安時代前期のものである。5～6は須恵器碗である。口径14.8cmを測る。口縁端部は肥厚し丸くおさめる。内外面とも回転ナデで仕上げる。7～11は無釉陶器碗である。6は口縁部が小さく「く」の字状に外反する。内面は磨きを施し、外面は回転ナデで仕上げる。底部は糸切りである。胎土は緻密で、色調は灰白色である。口径15.0cm、器高5.2cmを測る。7～9は直線的に外反する体部をもつ。7は貼り付け高台である。口径17.0cm、器高6.1cmを測る。胎土は緻密で、色調は灰白色である。10・11は底部片である。いずれも削り出し高台である。平安時代前期のものである。12・13は「て」の字状口縁の土師器小皿である。12は口径10.0cm、器高1.4cm。13は口径10.2cmを測る。10世紀後半～11世紀前半のものである。14は土師器杯である。丸みをもって立ち上がり、口縁端部を上方に小さくつまみ上げる。外面底部付近にハケの痕跡がわずかに残る。口径14.9cmを測る。胎土は密で、色調はにぶい黄橙色である。15～17は須恵器壺である。内外面とも回転ナデで仕上げ、底部は糸切りである。18～20は緑釉陶器底部片である。18・19は削り出しの輪高台である。胎土は密で、色調はオリーブ黄色・浅黄色を呈する。20は蛇ノ目高台である。胎土は密で、黒色の砂粒を含む。色調はにぶい橙色を呈する。21は黒色土器B類碗底部片である。貼り付



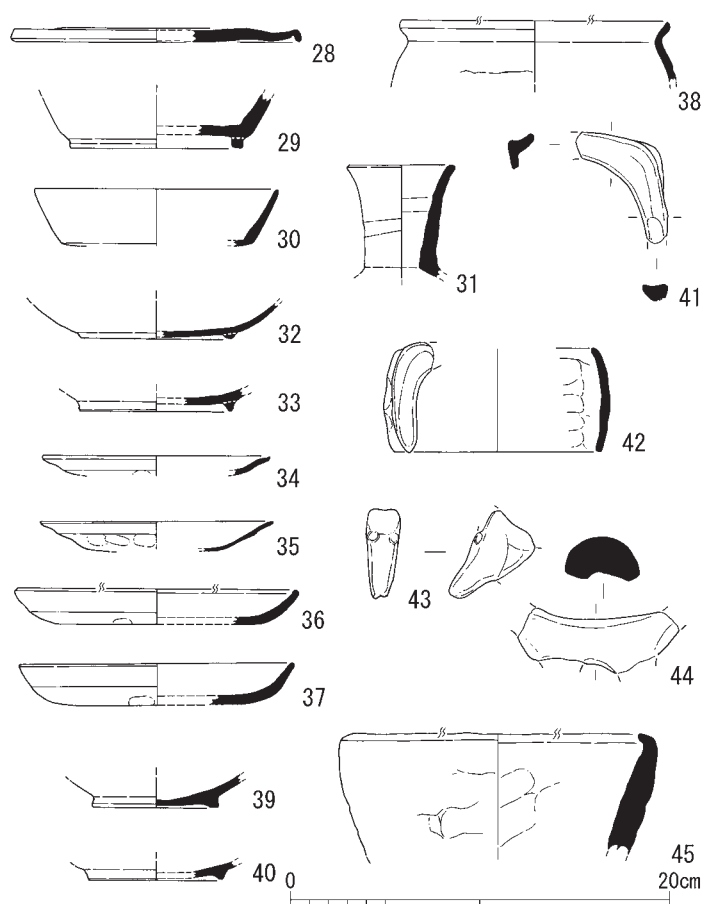
第6図 1トレンチ出土遺物実測図

け高台で、内面には密なヘラミガキを施す。22・23は須恵器壺である。22は貼り付け高台で、23は底部に糸切り痕が認められる。24は須恵器鉢底部片と思われる。25は須恵器甕、26・27は土師器甕である。

3トレンチ出土遺物(第7図、図版第6) 28~30・32・34~37・39~45は包含層中及び遺構検出作業中に出土した。31は第16層中、33は第12層、38はS D04より出土した。

28は須恵器蓋である。宝珠つまみが付くと思われる。口径15.0cm、色調は灰色である。29は須恵器Bである。貼り付け高台で、内外面とも回転ナデを施す。長岡京期~平安時代初期のものである。30は須恵器杯Aである。底部外面はヘラ切り後ナデが施される。口径12.7cm、器高3.0cm

を測る。色調は灰白色である。31は壺Gである。口縁端部は外反する。口径5.5cmを測る。32・33は土師器杯Bである。貼り付け高台である。長岡京期～平安時代初期のものである。34・35は土師器皿である。口縁部はヨコナデし、平らな底部からやや外反気味に立ち上がる。体部外面にはユビオサエが残る。35は口縁端部をわずかにつまみあげる。34は口径12.0cm、35は口径12.2cm、器高1.6cmを測る。色調はいずれも黄橙色である。36・37は土師器皿である。口縁部はヨコナデし、端部を丸くおさめる。36は口径14.6cm、37は口径14.4cmを測る。38は土師器甕である。色調は黄橙色である。39は緑釉陶器で、削り出し高台である。



第7図 3トレンチ出土遺物実測図

40は須恵器椀である。41・42はミニチュアカマドである。いずれも色調は橙色である。43・44は土馬である。43は頭部片である。44は胴部片である。頭部先端・脚部・尻尾を欠く。いずれも鈍い橙色である。45は製塩土器である。調整は内外面ともにナデである。胎土は粗く白色・白灰色の砂粒を多く含む。色調は橙色である。

4. まとめ

今回の調査では、平安時代前期～中期にかけての流路・柱穴、近世と考えられる溝・柱穴を検出した。なお、1～3トレンチ全てにおいて長岡京跡右京第968次調査で検出された平安時代前期～中期にかけての流路S D36の延長部を確認し、1トレンチでは同じ場所で上下に重複してS D01、02に分かれることが判明した。出土遺物は右京第968次調査で出土している古墳時代、奈良時代後半～平安時代中期にかけての遺物と同様のものであるが、瓦類の出土はほとんど認められなかった。3トレンチでは柱穴を検出しており、周辺に小規模な建物が存在した可能性がある。また、ミニチュアカマド、土馬等の出土から、周辺で祭祀が行われていた可能性もうかがえる。

(増田孝彦)

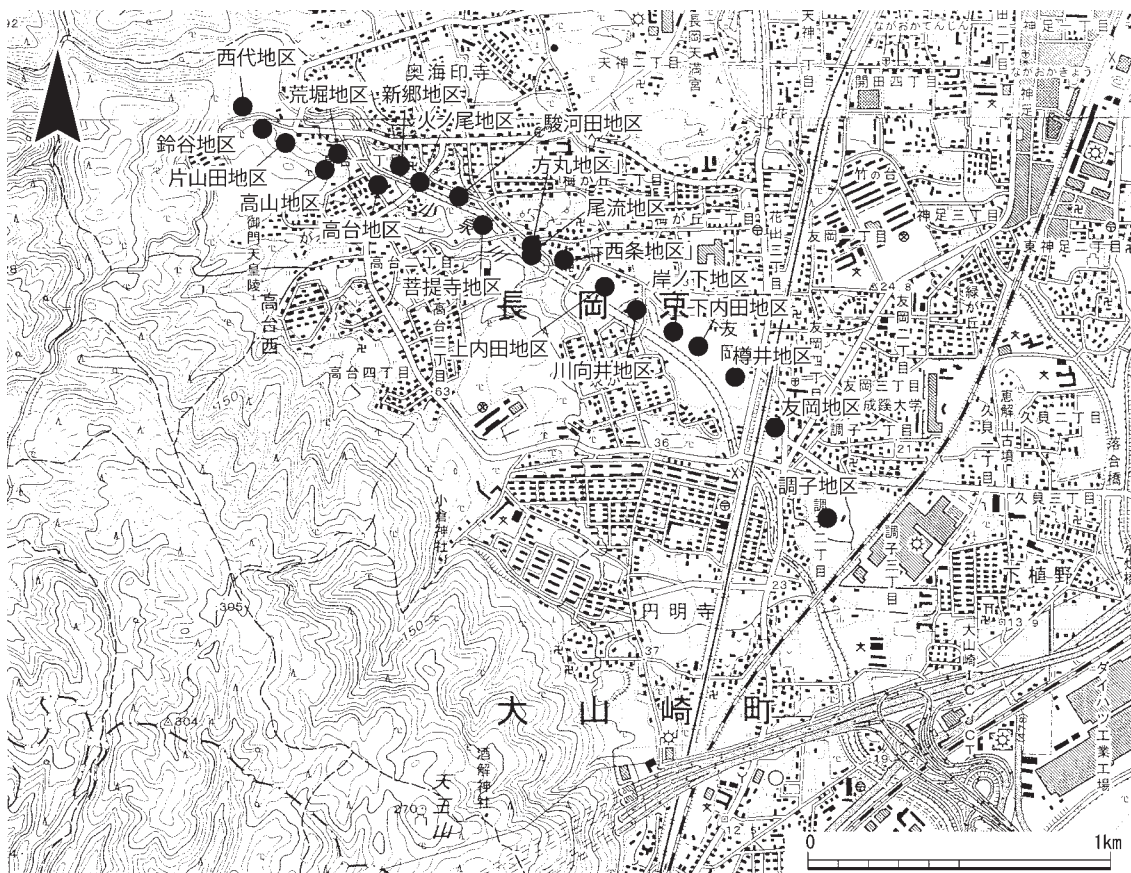
(2) 京都第二外環状道路関係遺跡発掘調査の総括

1. はじめに

京都第二外環状道路は、京都市南西部・乙訓地域の交通渋滞の解消のため、国土交通省近畿地方整備局が名神高速道路の大山崎インターチェンジから京都縦貫自動車道路沓掛インターチェンジまで約8.5kmの間、大山崎町から長岡京市を経て京都市西京区までの間に計画された。京都第二外環状道路関係遺跡の発掘調査は、平成15年度の友岡・樽井地区、下海印寺岸ノ下地区の調査を皮切りに、平成24年度に調子地区で実施した右京第1046次調査で終了を迎えた。この道路建設に伴う調査は、足かけ10年にわたって実施したことになる。

この地域には平安京遷都前の都である長岡京跡をはじめとして、多くの遺跡が分布している。そのため、道路建設に伴う事前調査として、大山崎町・長岡京市域の約3kmの区間については、主として公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査を実施した。

長岡京市内では、国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受けて、京都第二外環状道路関係遺跡として調査を実施した。長岡京市内での発掘調査対象地は約2.5kmにおよび、北か



第8図 京都第二外環状道路関係遺跡 調査地区配置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部・淀)

ら大字奥海印寺、高台、下海印寺、友岡、調子が位置している。調査対象地は広範囲に及ぶため、発掘調査地に小字名を冠して地区名として整理した(第8図)。

調査に当たっては、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会、公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターをはじめ、地元自治会、長岡京市建設部まちづくり推進室、関係各機関のご助力、ご助言を得た。ここに改めて感謝の意を表したい。

また、京都第二外環状道路関係遺跡の発掘調査は、主として国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受けて実施したが、一部、京都府、ネクスコ西日本株式会社の依頼により関連事業として調査を実施した箇所もある。これらの調査についても、今回の総括の中で取り上げている。

2. 奥海印寺地区

長岡京市大字奥海印寺では、小字西代以下、小字駿河田までの8つの小字にわたって調査を実施した(付表1)。遺跡地図では西代遺跡(西代地区)、鈴谷遺跡(鈴谷・片山田・高山地区)、奥海印寺遺跡(荒堀・新郷地区)、下海印寺遺跡(火ノ尾・駿河田地区)に当たる。

新郷～駿河田地区にかけては、小泉川の氾濫原にあたっており、小泉川の旧河道内の堆積砂礫を確認したにとどまった。西代から荒堀地区は丘陵上に位置しており、顕著な遺構・遺物を確認したのは、鈴谷遺跡の高山地区に限られる。

1) 西代地区(第9図、付表1)

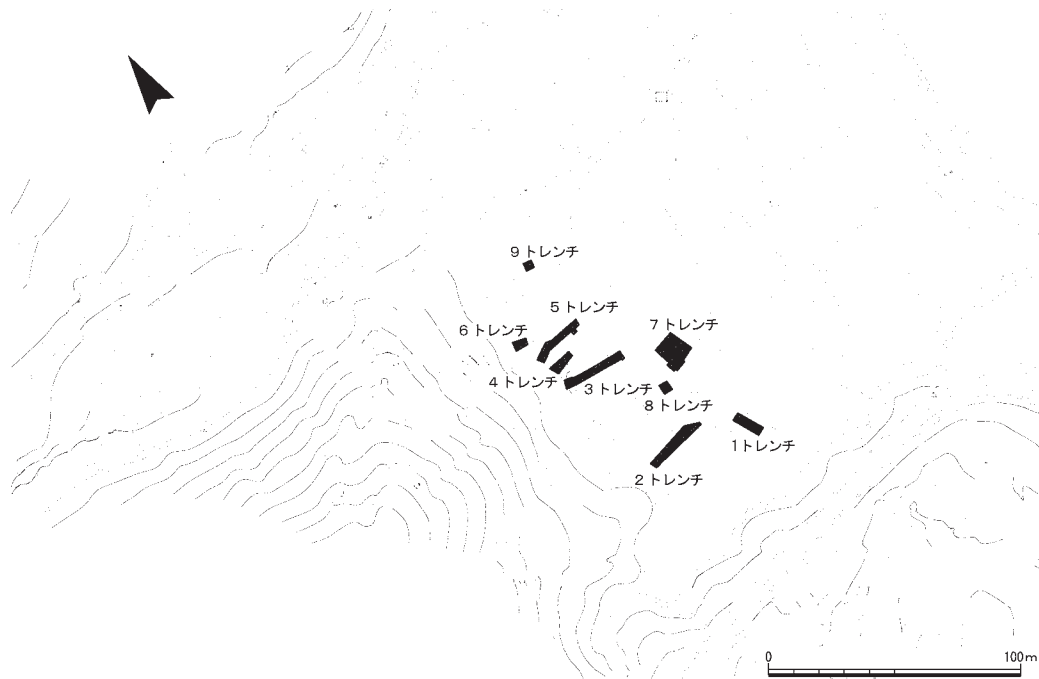
西代遺跡は東向きの緩斜地にある。平成21年度に長岡京市教育委員会が調査を実施し、古墳時代から中世にかけての包含層が確認され、周知の遺跡として認識された。

同年度に9か所のトレンチを設定して調査を行った。耕作土中からは古代から近世にかけての土器類が若干出土し、若干の柱穴を確認したが、その下位には大阪層群の粘土層が基盤層としてあった。段丘上に存在したと想定される遺構面は中世以後に大きく削平されたと推定される。

付表1 奥海印寺地区調査一覧

大字	地区名	調査年度	調査回数	トレンチ	概要	概報・報告集
奥海印寺	西代	21年度	-	1～9	顕著な遺構なし	142
	鈴谷	21年度	-	A～C	顕著な遺構なし、Cトレンチで長岡京期の遺物出土	149
		22年度	-	D	顕著な遺構なし	
	片山田	17年度	右京 851 次	1～5	顕著な遺構なし	124
	高山	20年度	右京 956 次	-	古墳時代後期の土器片出土	137
		21年度	-	A～D	家形埴輪・土師器・須恵器、長岡京期土馬出土	149
		22年度	-	A	横穴式石室・土坑・ピット	
	荒堀	17年度	右京 851 次	1～5	顕著な遺構なし	124
		19年度	右京 902 次	1～5	土石流の痕跡	131
		20年度	右京 956 次	1～6	時期不明溝	137
23年度		-	A～E	遺構確認できず	150	

調査回数 - は京外の単独調査のため、長岡京の調査回数をもたない



第9図 西代地区調査トレンチ配置図

2) 鈴谷地区(第10図、付表1)

A・Bトレンチでは、表土下に厚く竹林造成土が堆積し、近世以降の遺物が出土したが、顕著な遺構は認められなかった。Cトレンチ造成土下には遺物包含層が認められ、長岡京期の土馬や土師器壺等が出土した。Dトレンチは、Cトレンチで遺物の出土したことを受け、同トレンチの南に設定した。竹林造成土が厚く堆積しており、顕著な遺構・遺物は検出できなかった。

3) 片山田地区(第10図、付表1)

この地区は宅地跡にあたり、地表下1～2mで傾斜面となる旧地表を確認した。この旧地表を埋める土砂内から奈良～平安時代の土師器片が数点出土しただけで、遺構は確認できなかった。

4) 高山地区(第10・11図、付表1)

平成20～22年度に調査を実施した。Aトレンチおよびそれを拡幅した調査区で、古墳時代後期の土坑・ピット、終末期の横穴式石室、縄文時代、古墳時代、長岡京期の遺物を検出した。

古墳時代前・中期の遺物として、鱗飾の施される家形埴輪、円筒埴輪、朝顔形埴輪の破片が出土した。今回の調査地を含め、近隣には周知の古墳は確認されていないため、竹林造成によって破壊されたか、古墳が埋没しているものと推定される。

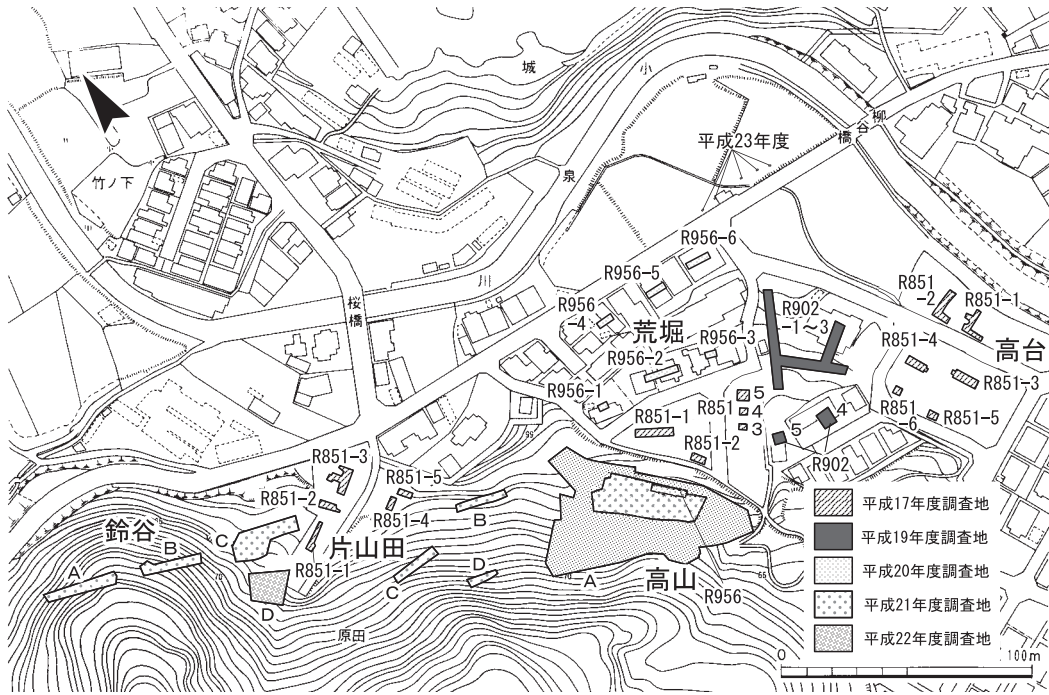
古墳時代後期では、土坑・ピットを検出した。住居跡は確認できなかった。

古墳時代終末期の横穴式石室1基(S X01)を検出した。時期は飛鳥Ⅲ～Ⅳ期に位置づけられ、乙訓地域全体でも新しい時期の古墳であり、古代寺院の鞆岡廃寺の創建と前後するものである。

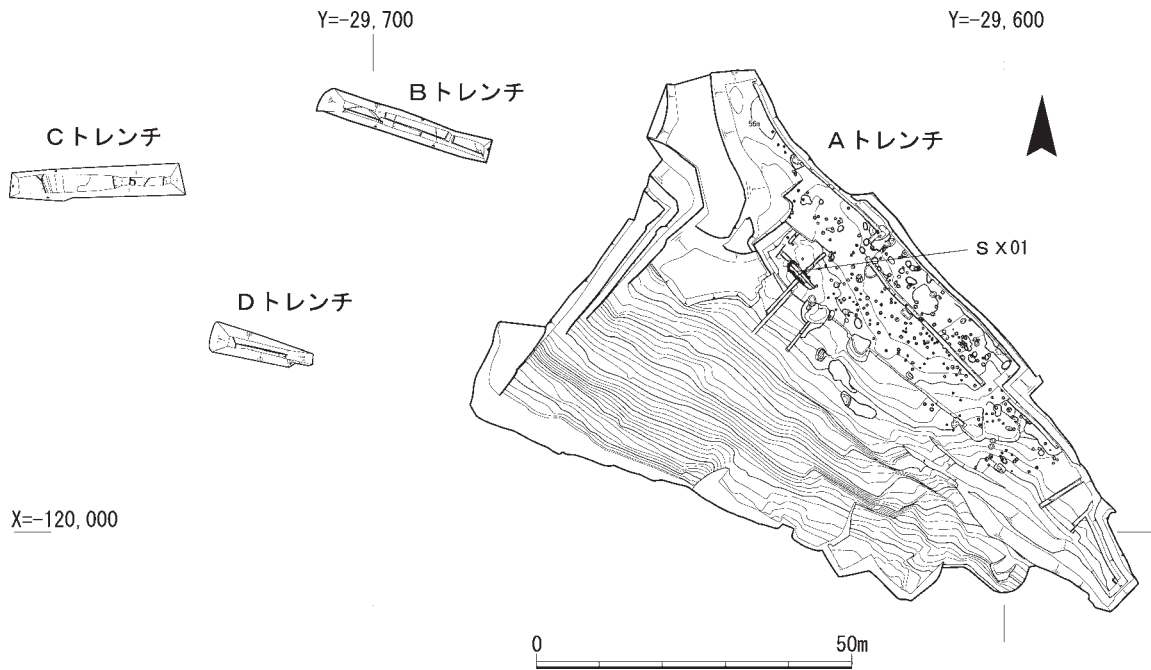
長岡京期の土馬や土器が、斜面地や斜面下の平坦面の包含層から少量出土した。調査地周辺の丘陵地が長岡京外として、祭祀行為が行われていたことが考えられる。

5) 荒堀地区(第10図、付表1)

荒堀地区では宅地造成時に厚い盛土がなされており、その下は旧地形(丘陵)の粗礫層となり、



第10図 鈴谷～荒堀地区調査トレンチ配置図



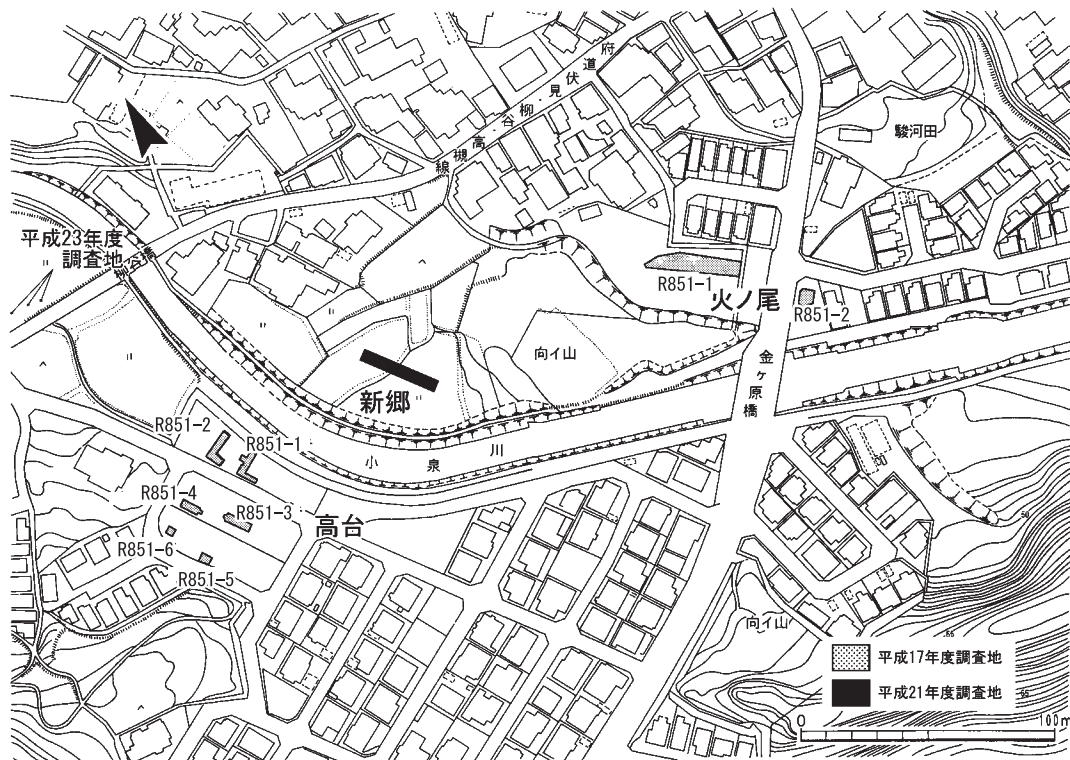
第11図 高山地区調査トレンチ配置図

顕著な遺構は見つからなかった。

平成23年度は府道の付け替えに伴う調査を実施したが、開発に伴う掘削深度は遺構面に到達しておらず、遺構・遺物は確認できなかった。

6) 新郷地区(第12図、付表2)

小泉川の左岸に位置し、地表下0.5mまでは水田耕作や整地に伴う堆積層を確認し、これらの層から染付片が出土した。その下位を2.7mまで掘り下げたが、礫・砂を主体とする河川堆積物を確認しただけで、遺物は出土しなかった。このような状況から、この地区は水田耕作として利



第12図 高台～火ノ尾地区調査トレンチ配置図

用されている時期を除くと、離水していた可能性は極めて低いと判断される。

7) 火ノ尾地区(第12図、付表2)

平成17年度に2か所でトレンチ調査を行った。資材置き場および宅地として利用されていた。ともに、現地表下1.9～2.4mまでが盛土されており、その下に造成以前の水田耕作土が広がっていた。この下には、床土が20～40cmあり、その下は旧流路内で堆積した砂礫層となる。床土内からは瓦器片・土師器片、砂礫層内からは古墳時代の須恵器・土師器片が出土した。

8) 駿河田地区(第13図、付表2)

駿河田地区では小泉川の左岸・右岸で調査を実施した。ともに包含層および遺構面は確認できなかった。左岸では、現地表下0.8～1mが現代の盛土で、その下に旧耕作土・床土があり、小泉川の旧流路内に堆積した砂礫層となる。床土内から土師器片・瓦器片が出土したことから、中世段階に水田が造成されたものと推定される。

右岸では、近世から現代に至る河川を確認し、安定した遺構面や遺物は確認できなかった。

3. 高台地区

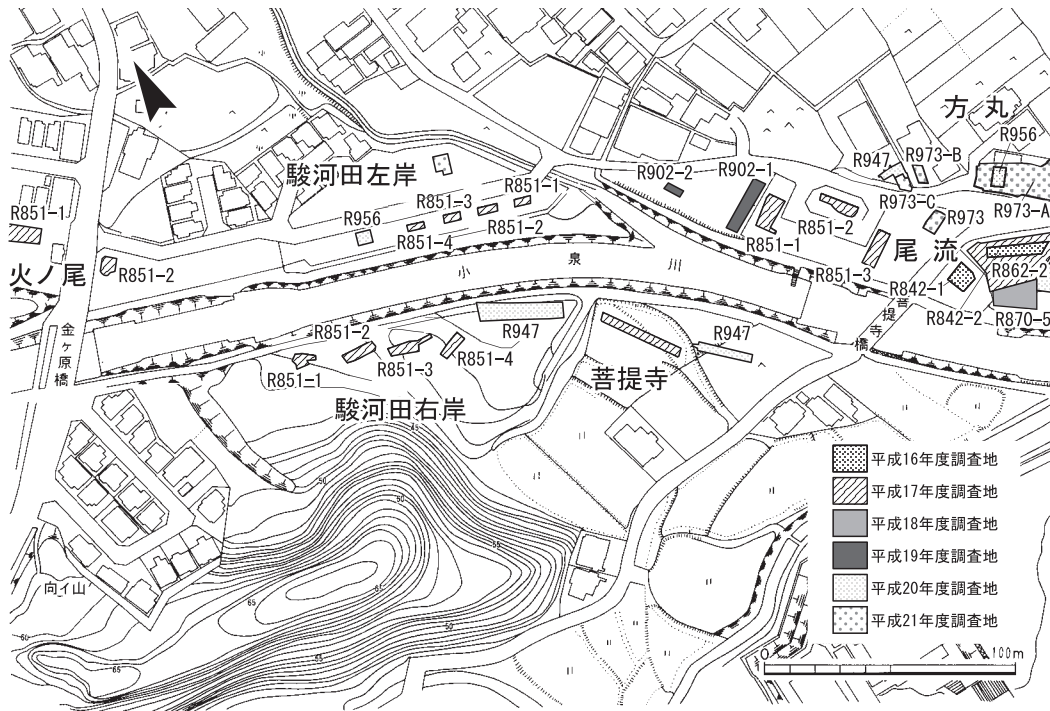
平成17年度に宅地跡地で調査を実施した(第12図、付表2)。現代盛土が地表下2.0～3.5mに及んでおり、その下に大阪層群の砂礫層が堆積していた。遺構・遺物は確認できなかった。

4. 下海印寺地区

長岡京市大字下海印寺では、小字菩提寺から小字下内田までの8つの小字にわたって調査を実

付表2 奥海印寺・高台地区調査一覧

大字	地区名	調査年度	調査回数	トレンチ	概要	概報・報告集
奥海印寺	新郷	21年度	-	-	河川堆積層を確認	142
	火ノ尾	17年度	右京 851 次	1・2	小泉川旧流路	124
	駿河田	17年度	右京 851 次	1～4	小泉川旧流路 (左岸)	
				1～4	小泉川旧流路 (右岸)	
		20年度	右京 947 次	-	旧河道内堆積	137
右京 956 次	-	旧河道内堆積				
21年度	-	-	旧河道内堆積	142		
高台	高台	17年度	右京 851 次	1～6	顕著な遺構なし	124



第13図 駿河田～菩提寺地区調査トレンチ配置図

施した(第8図)。遺跡地図では、下海印寺遺跡(菩提寺・方丸・尾流・西条地区)、伊賀寺遺跡(上内田・川向井・岸ノ下・下内田地区)に含まれる。また、尾流・西条地区より東側が長岡京域に相当する。

1) 菩提寺地区(第13図、付表3)

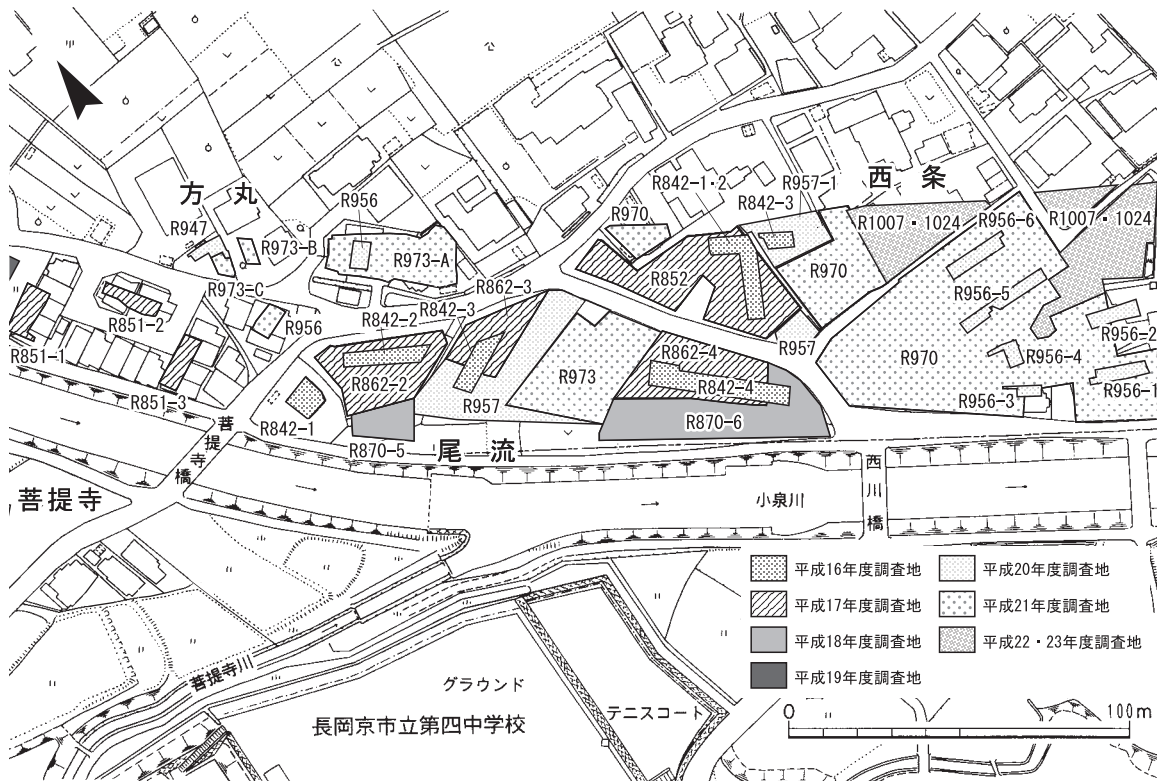
小泉川の右岸に位置し、平成17年度と平成20年度に調査を実施した。ともに、耕作土・整地土下では河川堆積の砂礫を検出した。これらは菩提寺川と小泉川の旧流路と考えられる。菩提寺川の旧流路内からは古墳時代の土師器高杯が出土したことから、周辺に同時期の集落跡が存在している可能性が認められた。

2) 方丸地区(第14・15図、付表3)

方丸地区は、低位段丘上に立地し、平成20・21年度に3か所で調査を実施した。いずれのトレンチでも幅3～3.5m、深さ0.8～1.7mの等高線に並行する中世の溝を検出した。その規模・方向から、同一の溝であると判断した。総延長66mにわたって掘削されており、何らかの土地区画を

付表3 下海印寺(菩提寺・方丸・尾流・西条)地区調査一覧

大字	地区名	調査年度	調査回数	トレンチ	概要	概報・報告集
下海印寺	菩提寺	17年度	右京 851 次	-	小泉川旧流路	124
		20年度	右京 947 次	-	顕著な遺構無し	137
	方丸	20年度	右京 947 次	-	中世溝、縄文時代土坑	137
			右京 956 次	-	時期不明土坑	
	21年度	右京 973 次	A～C	中世溝	142	
	尾流	16年度	右京 842 次	1・2	自然流路・古墳時代・奈良～平安時代溝	118
		17年度	右京 851 次	1～3	小泉川旧流路(長岡京期の可能性)	124
			右京 862 次	2～4	弥生時代竪穴建物・古墳時代竪穴建物・奈良～平安時代溝	
		18年度	右京 870 次	5・6	古墳時代流路、平安時代溝	126
		19年度	右京 902 次	1・2	小泉川旧流路	131
		20年度	右京 956 次	-	顕著な遺構無し	137
			右京 957 次	-	縄文時代土坑、弥生時代竪穴建物、奈良時代掘立柱建物	
		21年度	右京 973 次	-	弥生時代竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑	142
	西条	16年度	右京 842 次	1～3	古墳時代、奈良～平安時代	118
		17年度	右京 852 次	-	古墳時代竪穴建物、奈良～平安時代掘立柱建物	124
		20年度	右京 956 次	1～6	平安時代～中世柱穴・溝、古墳時代後期土坑	137
			右京 957 次	1・2	古墳時代掘立柱建物、奈良～平安時代柱穴、中世溝	
		21年度	右京 970 次	-	平安時代末～中世濠・掘立柱建物・柵列・土坑、	150
		22年度	右京 1007 次	-	長岡京期溝・土坑、古墳時代竪穴建物・土坑、	
	23年度	右京 1024 次	-	弥生時代竪穴建物		



第14図 尾流～西条地区調査トレンチ配置図

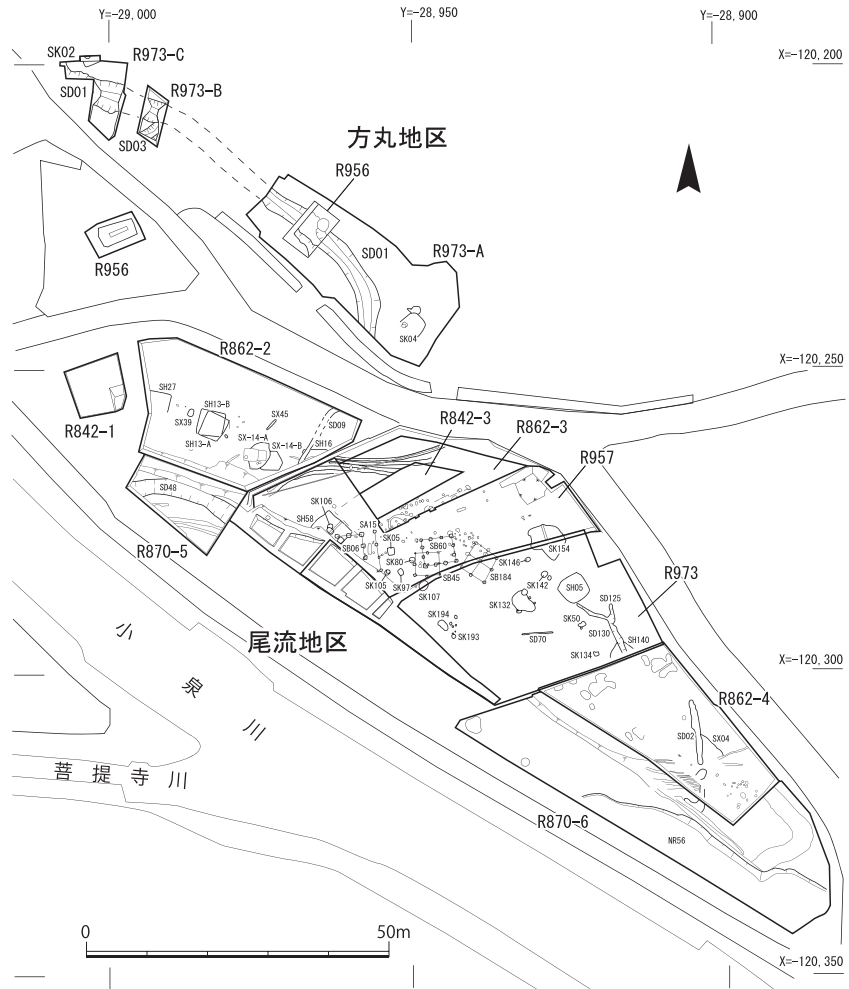
目的にしたものと想定される。

3) 尾流地区(第14～17図、付表3)

尾流地区は小泉川の河岸段丘上に位置し、方丸・西条地区よりも2m程度低位に位置する。この地区では、縄文時代、弥生時代、古墳時代、長岡京期の遺構を検出した。概要については、西条地区の項で総括する。

4) 西条地区(第14・16・17図、付表3)

西条地区は小泉川左岸の低位段丘上に立地する。尾流地区とは2m程度の高低差がある。

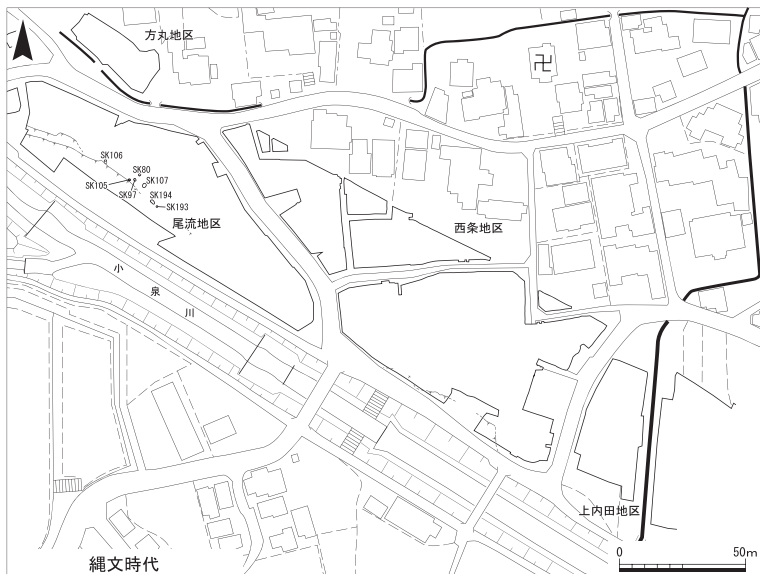


第15図 方丸・尾流地区検出遺構配置図

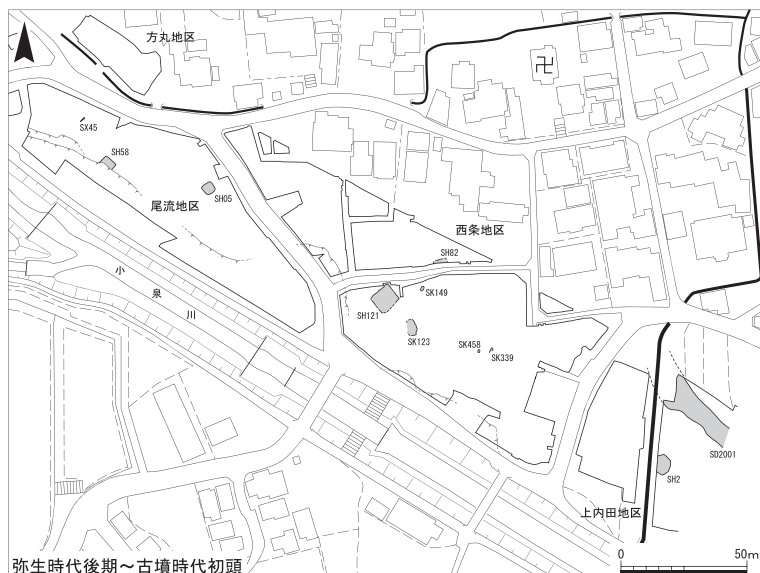
縄文時代(第16図) 尾流地区では後期・晩期の土坑・ピットを検出した。低位段丘上に位置する西条地区では、広範囲に調査を実施したが、この時代の遺構は確認できなかった。縄文時代後期の下海印寺遺跡の中心部分は、方丸・駿河田地区の北側の段丘上に位置していると考えられていたが、その分布範囲が河岸段丘上にも位置していることが明らかとなった。

弥生時代後期～古墳時代初頭(第16図) この時期の遺構は尾流地区から上内田地区の広い範囲に分布しているが、その密度は濃くない。上内田地区で検出した溝S D2001は、幅8mの流路で南東方向に流れており、その両岸で竪穴建物を検出した。S H121はベッド状遺構を有した、一辺9mを測る大型住居である。

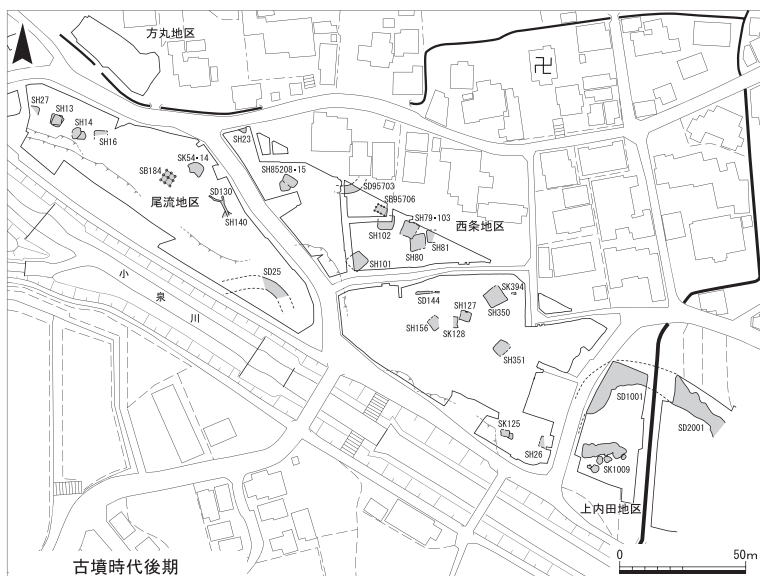
古墳時代後期(第16図) 尾流地区で溝S D25、上内田地区で溝S D1001・2001を検出し、段丘裾部を大きく蛇行する流路が復原できる。その北側の段丘上に位置する尾流地区・西条地区に竪穴建物が分布しており、尾流地区の北西側、西条地区の北側にはさらに竪穴建物が分布していることが想定される。南側の上内田地区では土坑群・流路跡を検出しただけである。掘立柱建物は、尾流地区のS B184、西条地区のS B95706の2棟を検出しただけである。また溝S D95703は、幅3.6mを測り、弓状に検出した。周辺の竪穴建物の埋土中から須恵器器台の破片が出土したことから、その規模・形状から、古墳に伴う遺構である可能性がある。



奈良時代～平安時代前期(第17図) 長岡京の右京七条四坊十一・十二・十四町付近に位置する。掘立柱建物、柵列、溝、土坑などを検出した。溝SD79・112・139からはミニチュア竈や土馬などが数多く出土した。西条地区の南東隅で検出したSD79・112、尾流地区の溝SD02は、その方向が真南北・真東西からわずかに振れており、長岡京条坊側溝の振れ角とは異なる。一方、真東西を向く溝SD366は、七条条間南小路付近に、真南北を向く溝SD132は西四坊坊間西小路付近に位置する。いずれも検出長10m前後であり、条坊側溝であるかどうかは不明である。尾流地区の掘立柱建物SB06の西側付近が西四坊大路の推定地と考えられるが、関連する遺構は検出できなかった。長岡京の国家的な祭祀場である西山田遺跡とは小泉川を挟んで対岸に位置し、その関連が注目される。

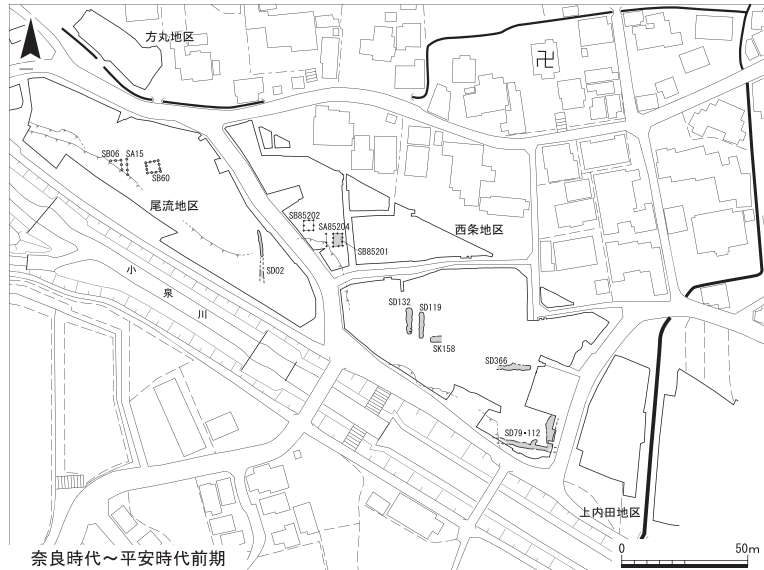


平安時代末期～鎌倉時代(第17図) 平安時代末期では、西条地区で検出した方形の屋敷地と、尾流地区南東部の遺構群がある。屋敷地は方形に堀が巡り、内側に柵列(板塀)が築かれ、堀の内部に方位を揃えて掘立柱建物が造られている。西辺の堀の中央には土橋SX133が



第16図 尾流・西条地区検出遺構変遷図 1

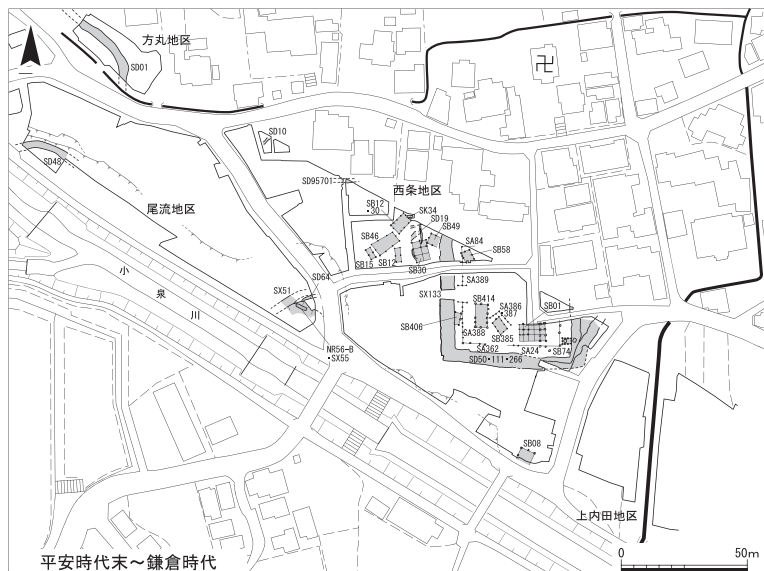
設けられている。屋敷は、11世紀末頃に築かれ、12世紀中葉にかけて存続している。尾流地区では、固く叩き締められた道路状遺構 S X51と、その側溝と判断される溝 S D64を検出した。東方約50mの延長線上に土橋 S X133が位置することから、方形区画の屋敷地から西方に通じる道路が復原できる。



鎌倉時代では、主軸方向が西に傾斜する掘立柱建物群や溝などがある。西条地区に集中しているが、その全容や原因については不明である。

5) 上内田地区 (第18・19図、付表4)

上内田地区は下海印寺西条の南東に位置し、西条地区の集落が高台に展開しているのに対して、その縁辺部の低い位置にあたる。縄文時代から近世にかけての集落遺跡である



第17図 尾流・西条地区検出遺構変遷図 2

伊賀寺遺跡に含まれ、長岡京跡では右京七条四坊五・十二町に位置する。

縄文時代 晩期の遺物が出土しただけで、遺構は検出できていない。

弥生時代後期～古墳時代初頭 竪穴建物、流路を検出した。竪穴建物 S H 2 は多角形住居で、その分布は東部瀬戸内地域の加古川流域に集中することから、同地域との交流がうかがえる。

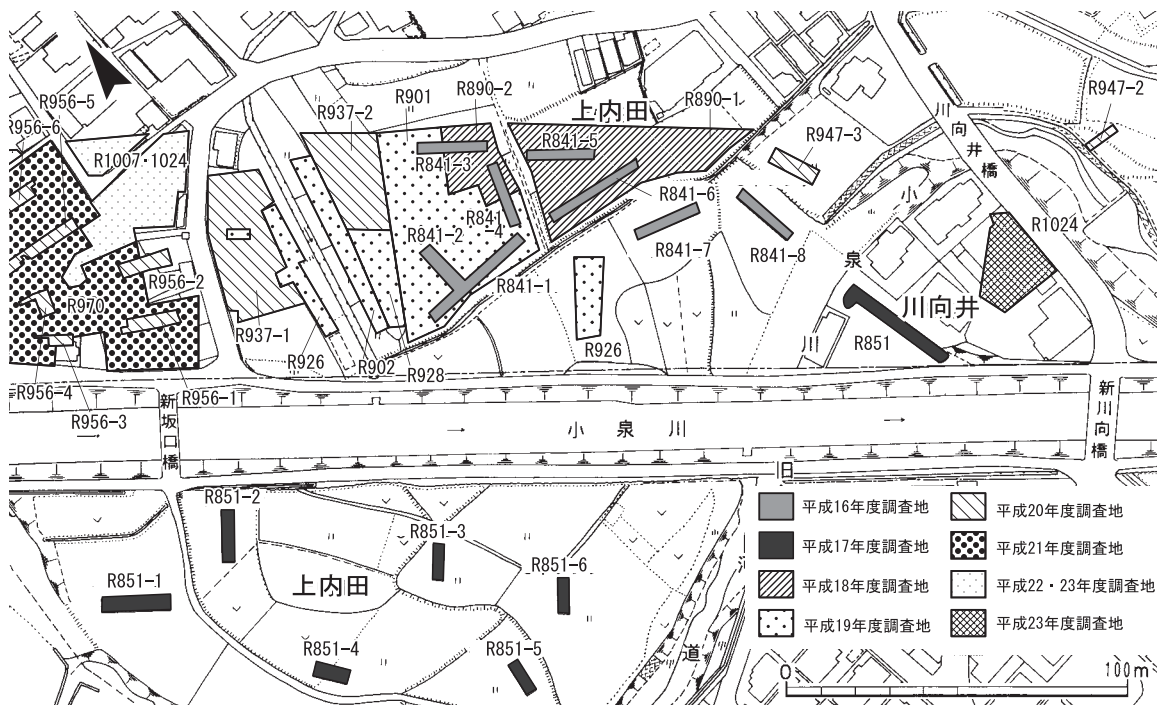
古墳時代後期 流路や土坑を検出した。

奈良～平安時代 建物は復元できなかったが、柱穴を検出した。この時期の土器や瓦が出土していることから、何らかの土地利用がなされていたことがうかがえる。R890-1の溝 S D 2 は、真東西の溝で、途中約40mは途切れるが、85mにわたって一直線に検出した。埋土中から古墳時代の遺物が出土したが、遺構の検出状況から長岡京期の可能性がある。

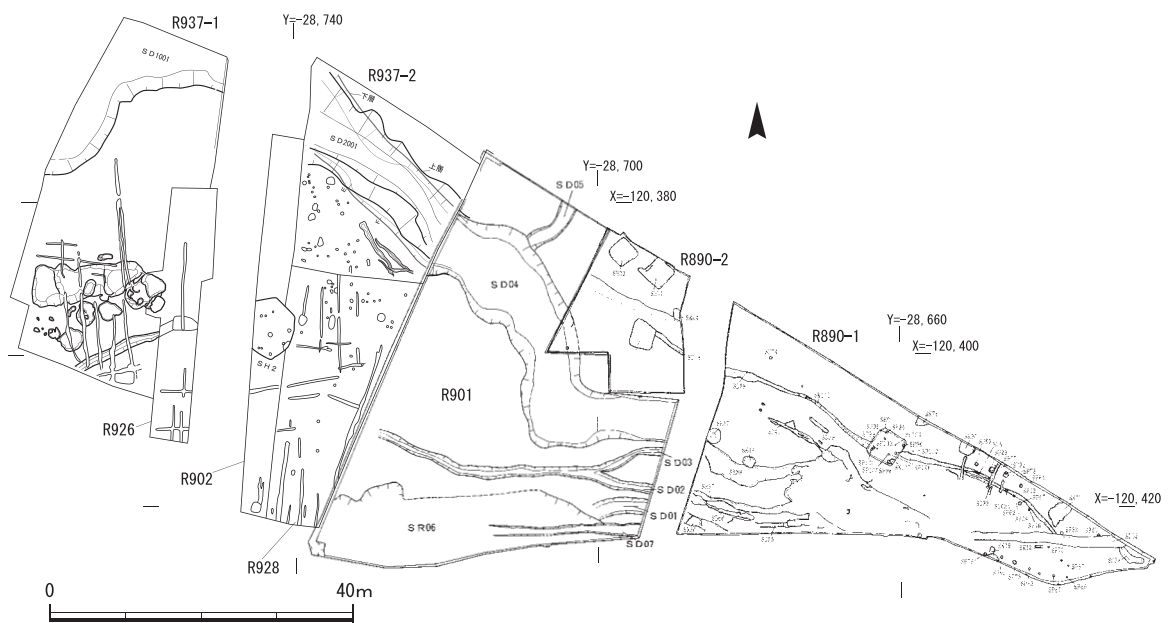
平成16年度には右岸地域の調査を実施した。現在の水田の下には近世以降の整地土層があり、その下には小泉川の旧流路内の砂礫が厚く堆積していた。

6)川向井地区(第18図、付表4)

川向井地区は、長岡京跡の条坊復原では右京七条四坊四・五町、七条大路(旧条坊では右京七条四坊二・七町、七条条間小路)に位置する。また、縄文時代～中世の集落遺跡である伊賀寺遺跡の範囲に含まれる。現在の小泉川は、昭和56年度以降に当時の建設省による河川改修で北西から南東方向の直線的な流路に改変されているが、それ以前は大きく蛇行しながら流れていた。川向井地区は、旧小泉川と現小泉川にはさまれた部分にあたる。西・北・東側には旧河道が蛇行していた痕跡が残ることから、南側の泉が丘地区からの丘陵が北に張り出し、その裾部に沿って旧河道が「U」字状に巡り、調査地は丘陵上に位置する可能性が認められた。



第18図 上内田～川向井地区調査トレンチ配置図



第19図 上内田地区調査トレンチ配置図

付表4 下海印寺(上内田・川向井)地区調査一覧

大字	地区名	調査年度	調査回数	トレンチ	概要	概報・報告集
下海印寺	上内田	16年度	右京 841 次	1～8	自然流路・古墳時代	118
		17年度	右京 851 次	1～6	小泉川旧流路	124
		18年度	右京 890 次	1・2	古墳時代流路、平安時代溝	126
		19年度	右京 901 次	-	古墳時代初頭の流路	131
			右京 902 次	-	古墳時代初頭の竪穴建物	
			右京 926 次	-	流路	
	20年度	右京 937 次	-	古墳時代流路、中世素掘り溝	137	
		右京 947 次	3	流路		
	川向井	17年度	右京 851 次	-	小泉川旧流路	124
		23年度	右京 1024 次	-	旧河道	150

2か所で調査を実施したが、耕作土・床土下には厚く砂礫層が堆積しており、中世以前は小泉川の氾濫原と判断された。この地区における耕地化は中世以降と判断される。

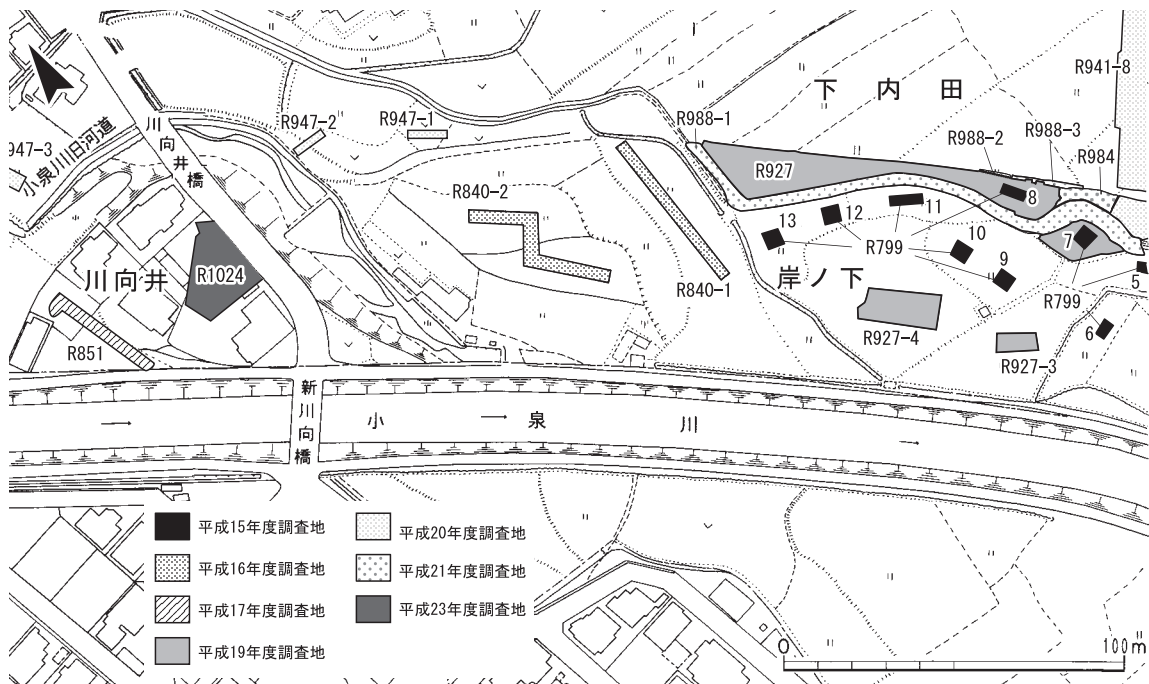
7) 岸ノ下地区(第20図、付表5)

発掘調査区は小泉川氾濫原にあたり、下内田地区とは約1mの段差が認められる。遺構・遺物の有無を確認するために、平成15・20年度に調査を実施した。

水田耕作に伴う整地土下には礫層が堆積しており、大阪層群の粘土層と続く。礫層には摩滅した奈良・平安時代の土器が含まれることから、律令期以降の洪水層と考えられる。礫層の上位にある旧床土・耕作土中には瓦器片や土師器片等が混じることから、中世以降に耕作地としての土地利用が開始されたと考えられる。

8) 下内田地区(第20～23図、付表5)

段丘上に位置し、縄文時代から長岡京期にかけての遺構・遺物が良好に遺存していた。



第20図 川向井～岸ノ下・下内田地区調査トレンチ配置図

縄文時代(第22図) 伊賀寺遺跡では、縄文時代の遺構・遺物がまとまって出土した。

縄文時代中期末の遺構は、R941-8南部、R943-2などの沖積段丘面の氾濫原に近い部分に集中する。段丘崖と沖積段丘面が接する地点では、中期には居住に適さなかった可能性がある。この時期の竪穴建物は9基検出し、このうち炉跡をもつ住居は3基ある。R927-2のSH08の炉跡は方形を呈し、四辺に大形の石を配置した石囲い炉である。R943-3のSH20は北東側に大形の砂岩製円礫を据え、その他の部分は粘土を貼り付けている。R988-3のSH89は、20cm程度掘り込んだ炉跡の北側に横方向に焼土が抜き取られたような部分があり、大形の石が据えられていた可能性がある。

後期前葉では、R927のSK51では、ほぼ完形の中津式の深鉢1個体が埋納されていた。また、R927・988で土器片が出土しているが、これらの時期の明確な遺構は検出されていない。

後期前葉(北白川上層式1～3期)では、R927・988で竪穴建物2基や土坑を検出した。R988-1のSH78は中央に炉をもつ方形の竪穴建物で、SH107は隅丸方形の竪穴建物である。

R988のSX199は縄文時代に河川によって形成された崖面である。この崖面の斜面に北白川上層式の土器が堆積していた。土器は時期幅が限られた良好な資料で、北白川上層式2期の新相もしくは3期の古相として位置づけられる。

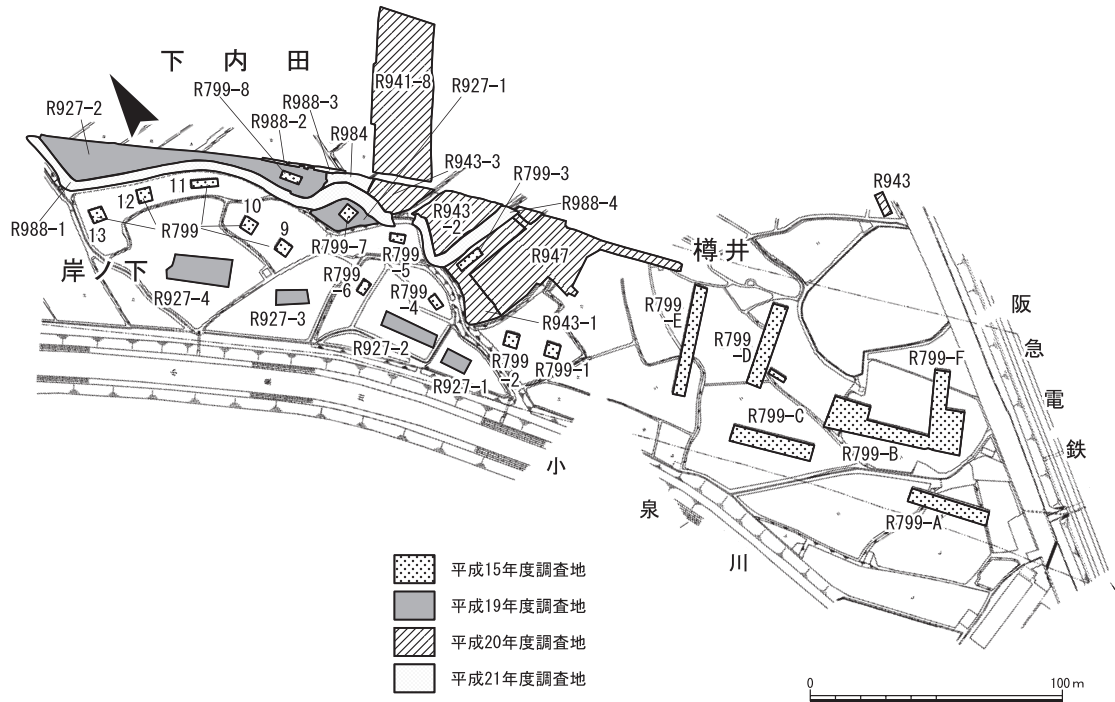
後期後葉では、竪穴建物はR941-8で5基、R943-2で1基、このほか竪穴建物の可能性のあるものが各1～2基ある。また周辺より玉作りに関連する原石や成形加工時の碎片、平玉の未完成品が出土し、玉作りが行われていたことが明らかとなった。また、R941-8からR943-2トレンチにかけて墓域が広がっている。R943-2では、骨片を含む土壌のほか、火葬した骨を埋納した土壙墓を2基(SK03・26)検出した。

晩期前葉では、R988-1のSK73が唯一のものである。大型の土器の破片を敷いた上に平らなチャート礫を載せ、さらにその上に大型の土器の破片を被せたていた。

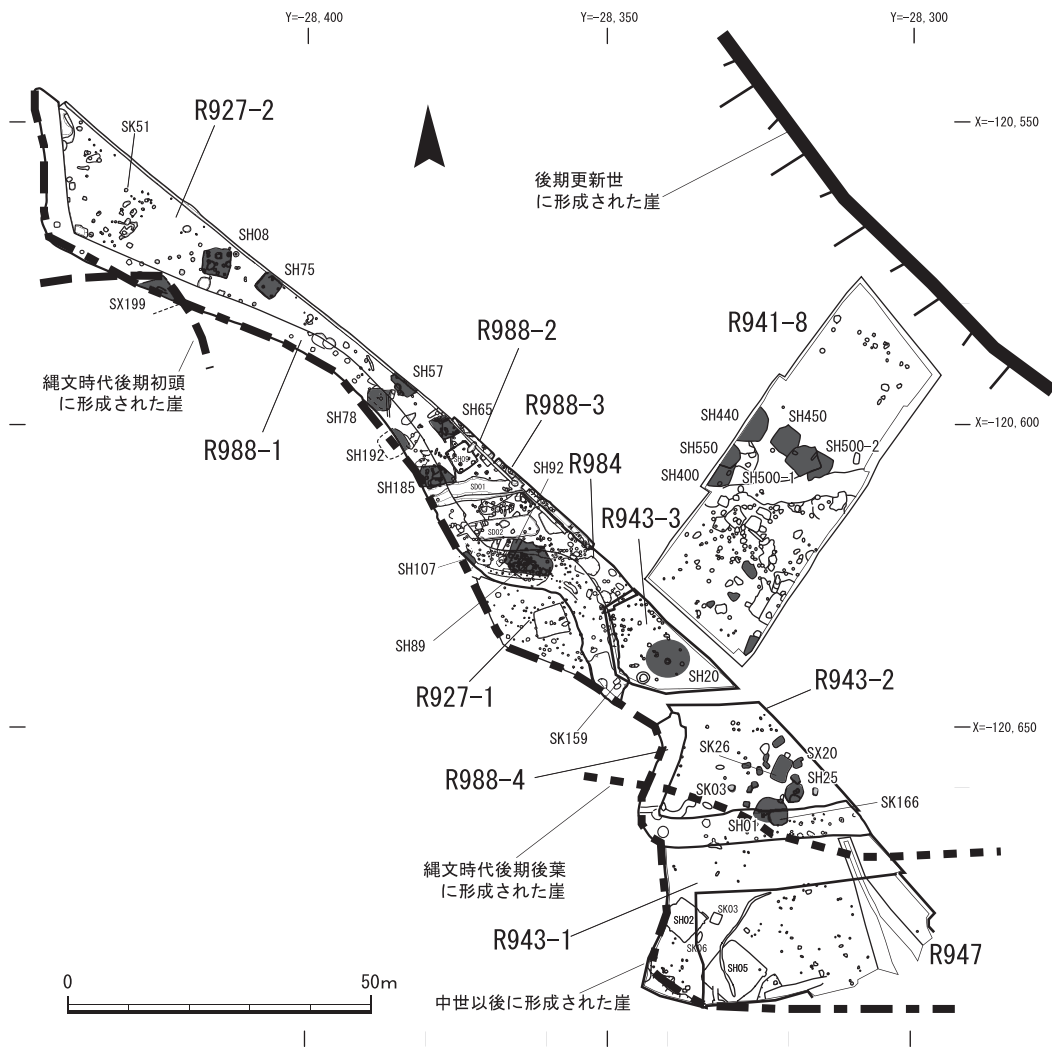
弥生時代末～古墳時代初頭(第23図) R943-1で竪穴建物SH02・05を検出した。SH05は北東・北西・南西辺にベッド状遺構を有するもので、南東辺中央には袋状の土坑がある。R941・948で

付表5 下海印寺(岸ノ下・下内田)地区調査一覧

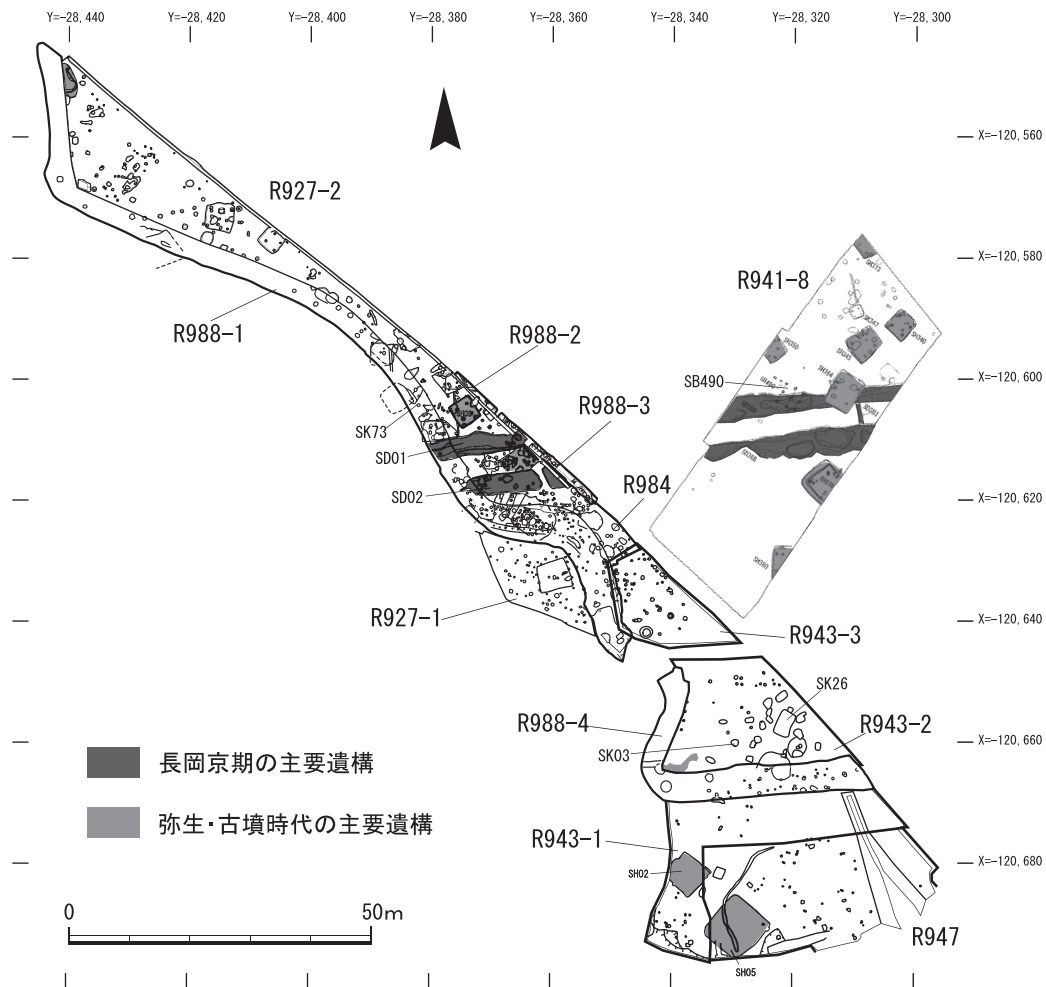
大字	地区名	調査年度	調査回数	トレンチ	概要	概報・報告集
下海印寺	岸ノ下	15年度	右京799次	1～13	自然流路、縄文・長岡京期・中世	113
		16年度	右京840次	1・2	自然流路	118
		19年度	右京927次	1～4	自然流路	136
	下内田	19年度	右京927次	1・2	縄文時代竪穴建物・土坑、古墳時代竪穴建物、長岡京期溝・柱穴	136
		20年度	右京941次	8	縄文時代竪穴建物・土壙墓、古墳時代竪穴建物、長岡京期溝	137 府道関係
			右京943次	1～3	縄文時代竪穴建物・火葬墓・土壙墓、弥生時代竪穴建物・溝	133 府道関係
			右京947次	1・2	流路	137
		—	—	弥生時代竪穴建物、中世掘立柱建物・溝		
	21年度	右京984次	—	縄文時代土坑	148	
		右京988次	1～4	長岡京期溝・掘立柱建物、古墳時代溝、縄文時代竪穴建物		



第21図 下内田～樽井地区調査トレンチ配置図



第22図 下内田地区 縄文時代遺構配置図



第23図 下内田地区 弥生時代～長岡京期遺構配置図

はこの時期の遺構は検出していない。

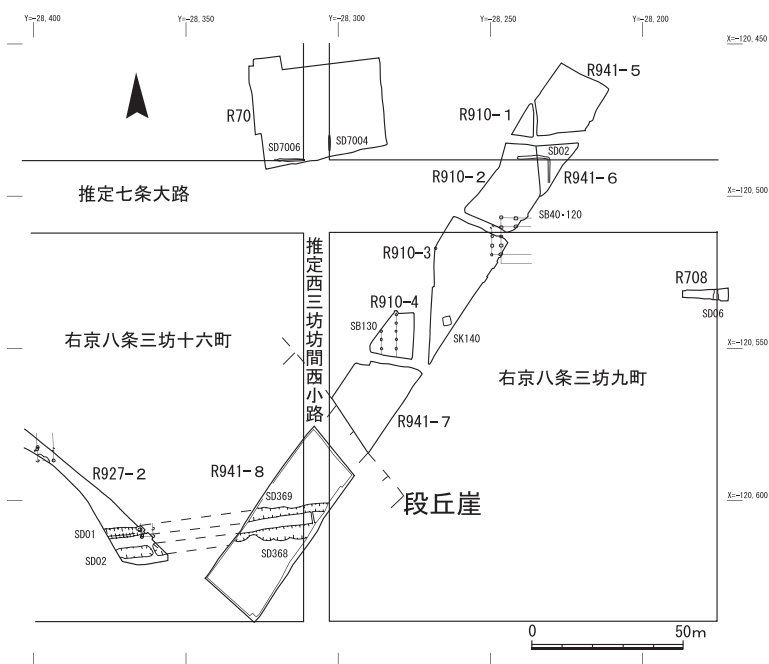
古墳時代(第23図) R941-8で後期の竪穴建物8基、掘立柱建物SB490を検出した。この時期の集落遺構は、段丘上のやや奥まった位置に分布している。

長岡京期(第23・24図) 下内田地区は右京八条三坊九・十六町にあたる。周辺地では長岡京期の遺構が見ついている。右京第70次調査では、七条大路北側溝(SD7006)と西三坊坊間西小路東側溝(SD7004)とされる溝が報告されている。R910-2では、「L」字に曲がる溝SD02が検出されており、その東西方向部分が七条大路北側溝位置に合致する。しかし、R910-2では、推定七条大路上に建物が建てられており、これらが条坊側溝とは一概に判断できない状況である。

R927-2、R941-8では、溝SD01・02を検出した。両溝は平行して掘削されており、築地塀の内・外に掘削された溝の様相を示すが、東で7°北に振り、長岡京の条坊の振れ角とは異なる。周辺では、これらに直交する方向の溝や建物を検出した。

こうした東で7°北に振る遺構群と、正方位を向く遺構群との関係を検討すると、正方位を向く遺構群は低位段丘上に立地しており、東で7°北に振る遺構群は沖積段丘上に分布している。両者の間には2m前後の段丘崖があることから、この崖面の存在が条坊計画線の不整合をもたらした可能性がある。また、長岡京は十年の都であり、近年の成果では七条近辺までしか条坊は施

工されていないと考えられている。当該地は京内と京外を分けるまさにその境界辺りに位置しており、京内と京外という立地の違いを反映している可能性も想定できる。



第24図 下内田地区 長岡京期遺構配置図

5. 友岡地区

大字友岡には樽井地区と友岡地区がある(第8図)。

1) 樽井地区(第21図、付表6)

樽井地区は長岡京市友岡樽井地内にあり、下内田地区の南東側、小泉川の氾濫原に位置している。伊賀寺遺跡が所在する下内田地区よりも1m程度の高低差を有して低い位置にあたる。

平成15年度にR799次調査、平成20年度にR943・947次調査を実施した。いずれのトレンチでも、耕作土・床土下には旧耕作土・床土などの整地土があり、若干の土師器・須恵器・瓦器などが含まれていた。この下位には小泉川の旧流路内の堆積砂礫があり、平安時代以前の土器片が摩滅した状態で出土した。

以上のことから、この地区は中世段階まで小泉川の氾濫原であり、中世以後に水田として土地利用されたものと判断された。下内田地区との間の高低差は、下内田地区では長岡京期の遺構が遺存していることを考え合わせると、中世以後に形成されたものと推定される。

2) 友岡地区(第25図、付表6)

いずれのトレンチでも、耕作土・床土下には整地土があり、中世の土器片が含まれていた。この下位には小泉川の砂礫が堆積していた。この地区は、中世段階まで小泉川の氾濫原であり、中世以降に水田として土地利用されたと判断できる。R825-8は旧西国街道上に位置しており、近

付表6 友岡地区調査一覧

大字	地区名	調査年度	調査回数	トレンチ	概要	概報・報告集
友岡	樽井	15年度	右京 799 次	A～F	自然流路	113
		20年度	右京 943 次	-	河川堆積	133 府道
			右京 947 次	-	旧河道	137
	友岡	16年度	右京 825 次	1～9・15	自然流路	118
		17年度	右京 851 次	1～3	小泉川旧流路	124
		19年度	右京 926 次	-	流路跡	131
		21年度	右京 969 次	d 2・d 3	流路跡 (調子地区として調査)	149

世以後に道路が盛り土されていく状況を土層断面で確認した。この街道に近接した位置でも現代の盛土を検出しただけで、中世～近世の街道に面した家並み等は確認できなかった。

6. 調子地区

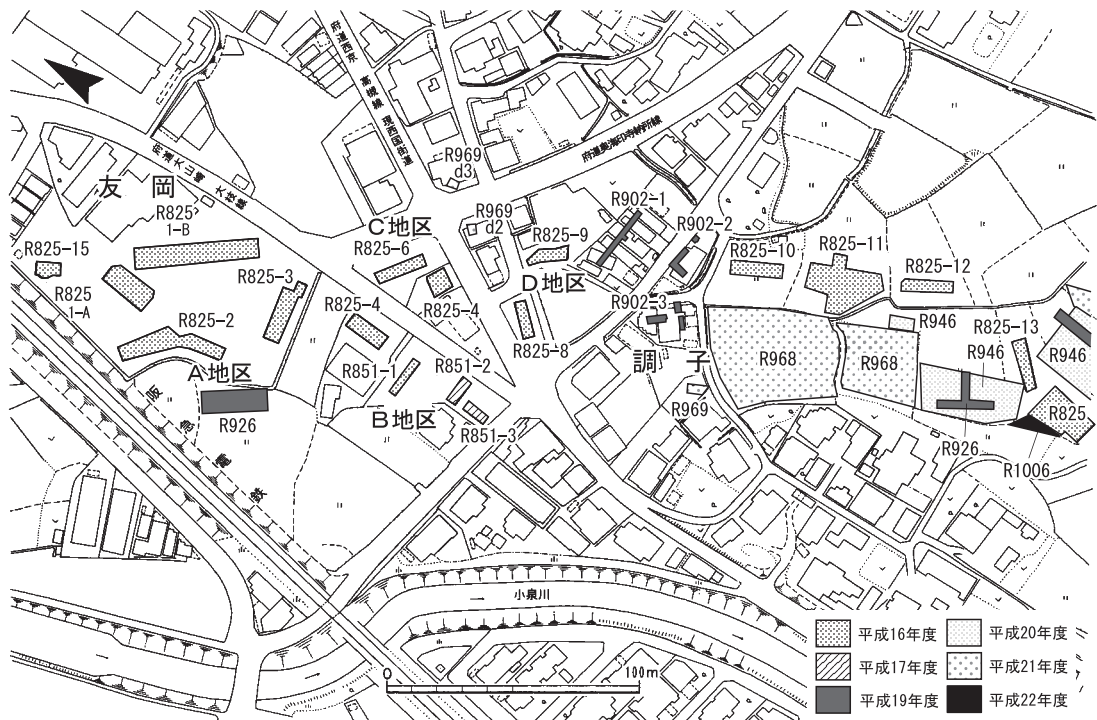
調子地区は長岡京市の南西部に位置し、大山崎町との境に位置している。この地区は長岡京跡の範囲に含まれているが、従来、発掘調査が実施されておらず、遺跡の有無も含めて、その実態がよく分かっていなかった。

平成16・17年度に遺跡の範囲確認調査を実施したところ、遺構が全域に分布していることが判明した。この確認調査の結果、調子集落から南東に延びる里道を中心に弥生時代～中世に至る集落遺構が分布し、その北側には中世以降の畑や水田の遺構が分布していることが明らかとなった。集落遺構が分布していると想定される範囲を中心に、里道の北側をa地区、南側をb地区とした。b地区の北側で、やや地形が下り、畑地・水田が分布していると推定される範囲をc地区とした。さらに、c地区の北側、府道奥海印寺納所線と府道西京高槻線の交差点付近をd地区とした(第25・26図、付表7)。d地区は調子集落が立地する宅地となっている。

縄文時代 b8-3では晩期のピットを検出し、b8-2では包含層中ではあるが、突帯文土器が出土している。周辺に同時期の集落が分布している可能性がある。

弥生時代 調子a地区の南東部分およびb地区の北半で、安定した遺構面が存在した。a4-1では竪穴建物を2基検出した。a1では弥生時代中期中葉の土坑から銅鐸形土製品が出土した。共伴遺物は畿内第Ⅲ様式のもので、鐸の内部から舌が出土した。

a地区の北西・西側は流路があったと推定される。この流路は、調子地区の調査対象地の西辺



第25図 友岡～調子地区調査トレンチ配置図

に沿うような形で流れ、b 1 から南東側に流路を変えて b 8 を縦断していたと復原できる。c 地区はその氾濫原であったようである。

b 地区の南半にあたる b 2～4、b 6・7・9 は、北半の微高地と比べて1.3～1.5mの低地となっている。その間の b 1、b 8-1～3 は微高地から南に下る緩傾斜面をなしており、自然流路が南北に縦断しているほかは、遺構の密度は薄い。

微高地下の低地である b 2・6・9 では、大きくは西から東へ向けての流路跡を確認した。内部からは多くの弥生土器が出土している。流路の西側には現在の調子集落が立地しており、この時期の集落跡が存在している可能性がある。

調子地区の南には中期中葉の方形周溝墓を検出した下植野南遺跡があり、今回の集落跡との関係が窺われる。

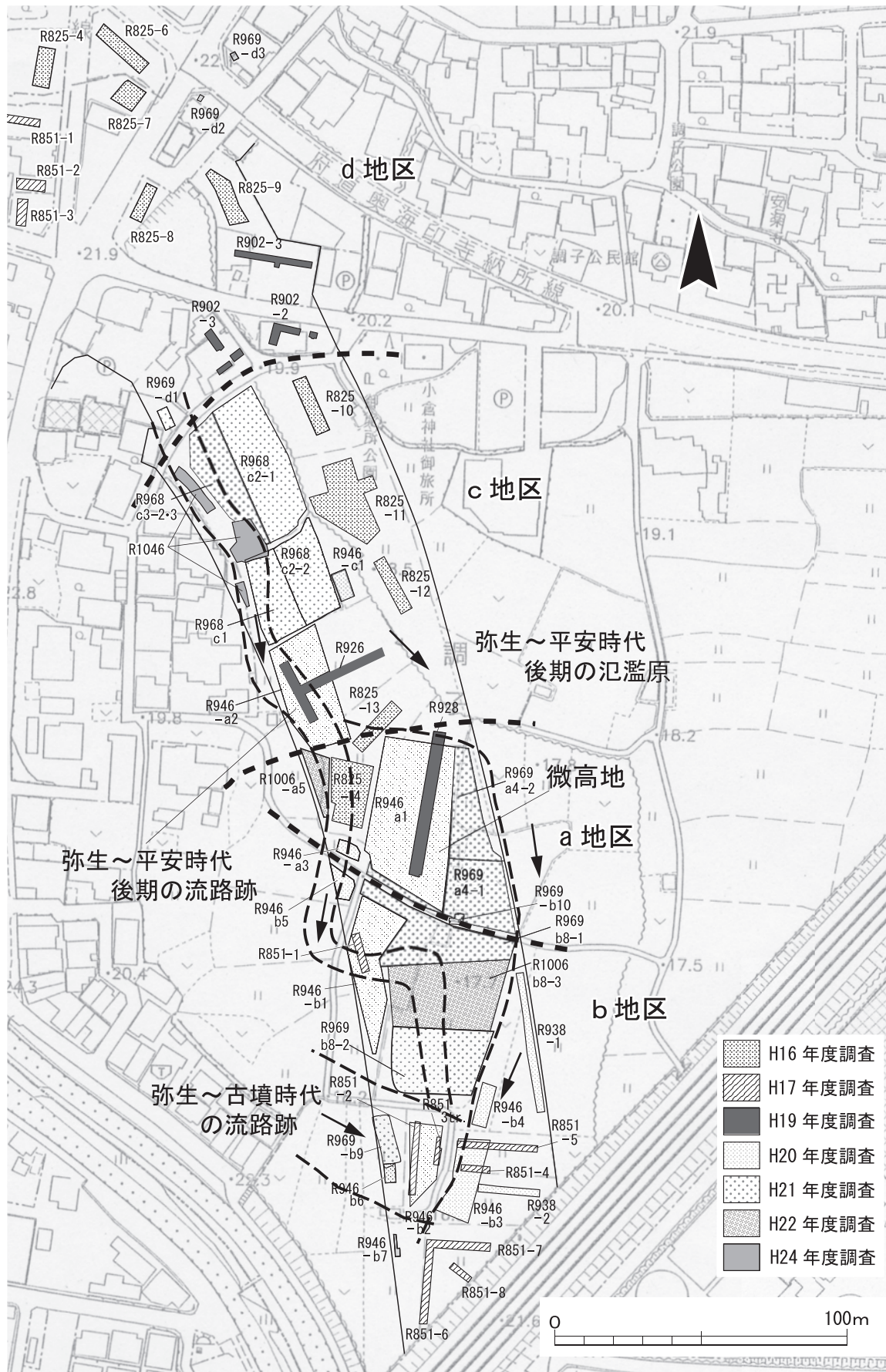
弥生時代末～古墳時代初頭 微高地上の最高所である a 地区では同時期の遺構は確認できていないが、b 8-2 で土坑を検出した。遺構密度の薄さから集落の縁辺部に位置しているものと想定される。a・c 地区の西辺を流れ b 地区を縦断する流路と b 地区の南辺を東西に横断する流路は前代と同様に分布している。これらの流路内に同時期の土器が含まれることから、今回の調査地の近辺、おそらく、現調子集落の下にこの時期の集落が位置しているものと推定される。

古墳時代 a 地区の北東部の遺構検出面下層の礫層と、b 8-3 の自然流路、b 2 の自然流路内から、後期の須恵器片がわずかに出土しただけで、同時期の遺構は確認できなかった。出土量がわずかであることから、集落は周辺に立地していないものと推定される。

奈良時代 調子地区全体でこの時期の遺構は確認できなかった。各地区の包含層から、その可能性が認められる小片が出土しているだけで、全体の出土量もわずかであることを考慮すると、

付表7 調子地区調査一覧

大字	地区名	調査年度	調査回数	トレンチ	概要	概報・報告集
調子	調子	16年度	右京 825 次	10～14	自然流路	118
		17年度	右京 851 次	1～8	自然流路	124
		19年度	右京 902 次	1～3	自然流路	131
			右京 926 次	-	中世の柱穴・溝	
			右京 928 次	-	中世の柱穴・溝	
		20年度	右京 946 次	a1～a3	中世掘立柱建物・柵列・井戸・木棺墓・土坑・溝、弥生時代溝・土坑・柱穴	145
				b1～b7	弥生時代土坑・流路、古墳時代流路、平安～中世柱穴・流路	149
		21年度	右京 969 次	a4-1・2	中世掘立柱建物・井戸・土坑・溝、弥生時代竪穴建物・土坑	145
		21年度	右京 969 次	b8-1・2、b9・10、d1～3	弥生時代土坑、平安～中世掘立柱建物・流路・池状遺構・井戸・土坑	149
		22年度	右京 1006 次	a5	近世以後井戸	145
				b8-3	縄文時代晩期土坑、弥生～中世流路	149
		24年度	右京 1046 次	-		本報告
		20年度	右京 938 次	b8-3	流路	133 府道
21年度	右京 968 次	-		141 府道		



第26図 調子地区調査トレンチ配置図

奈良時代の集落はこの地域にまで及んでいないものと考えられる。

長岡京期 長岡京条坊復原によると、今回の調査地は右京九条一～三町にあたる。調子地区全体において、長岡京期の遺構は確認できなかった。出土遺物の中には長岡京期と判断してもよいものも散見されるが、確証は得られない。a地区とb地区の北半にあつては、弥生時代などの遺構が遺存していることから後世にさほど削平を受けているとは考えにくい。そのため、長岡京関連の造作は、調子地区の南半に及んでいなかったものと判断される。

平安時代～中世 調子地区の北半では、c2、a2から平安時代前期から中期の遺物が多く出土した。土器に混じって瓦片、凝灰岩が出土し、a2からは風招が出土している。北西側の未調査区に古代寺院が存在していた可能性がある。

今回の調査地の北西から南東方向に分布する流路は、弥生時代から平安時代後半頃までの遺物を含み、時代によって流路をわずかに変えながら流れていたと推定される。この流路がほぼ廃絶してから、調子地区の特に北半部のc地区が離水したようで、c地区では中世以降の水田・畑作遺構が見つかり、この時期以降に土地利用がなされている。

また、a・b地区では11世紀から12世紀にかけての遺構を多く確認できた。a1、a4-1、a4-2、b8-3では掘立柱建物を検出し、その他の地区でも井戸や多数の柱穴、土坑、溝を検出した。また、a1では12世紀の木棺墓を検出した。この時期以降は土地が安定し、離水した後集落が広がったものと考えられる。

また、b地区の南半である微高地の下でも、b3でこの時期の水田遺構が確認されており、調子c地区と同じく、田畑としての土地利用がなされたようである。おそらくこの時期以降に、荒蕪地を耕作地として活用するための開発がすすんだものであろう。

このように、c地区からb地区に至る数百mにわたって土地の利用状況が変わっている点を重視すると、この時期に小泉川の管理が十分になされるようになったことが要因として想定できる。

12世紀以後、この地域では耕作溝や野井戸といった耕作関係の遺構があるのみで、居住域としての役割を果たしていなかったものと考えられる。

b1・b8では近世の耕作関連の小溝群や井戸が検出されている。R851-7では現代の野井戸が確認されており、これはa・c地区でも居住関係の遺構が確認できないという点で同じ状況である。中世の中頃以後、調子地区全域は生産域として土地利用されたと考えられる。

d地区はc地区の北側にあたる。c地区では多数の流路跡を検出し、埋土から奈良～平安時代を中心に、中世以前の土器が出土した。d地区では中世段階の包含層を確認し、その下位では流路内堆積の砂礫層を確認した。中世以後に耕作地が拡大するのはc・b地区と同じである。

7. まとめ

京都第二外環状道路関係遺跡の調査を終えるにあたって、10年間の調査を振り返ると、大きく見ると、大山崎町・長岡京市を北西から南東に向けて、小泉川に沿って、筋状のトレンチを設けて調査を行ったこととなる。小泉川の影響を受け、遺構を確認できなかったところも多くあるが、

下記の点で大きな成果を得ることができた。

鈴谷地区での終末期古墳の検出、周辺に中期古墳が埋もれている可能性が認められた。西条地区から上内田地区にかけての古墳時代集落の広がりを検出し、大規模な集落が分布していることが明らかとなった。西条地区では中世方形居館を検出し、在地における有力者の存在を遺構として確認することができた。西条・尾流地区、下内田地区では長岡京期の遺構を検出し、長岡京西四坊における土地利用の実態が明らかとなった。また、下内田地区において縄文集落を検出し、小泉川流域において縄文集落が継続的に営まれていることが明らかとなった。調子地区においては土地利用の変遷が明らかとなり、小泉川と各時代の集落との関係を推定することができた。

(岩松 保)

参考文献

- 「京都第二外環状道路関係遺跡平成15年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第113冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005
- 「京都第二外環状道路関係遺跡平成16年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第118冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006
- 「京都第二外環状道路関係遺跡平成17年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第124冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007
- 「京都第二外環状道路関係遺跡平成18年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査概報』第126冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2008
- 「京都第二外環状道路関係遺跡平成19年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査概報』第131冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009
- 「京都第二外環状道路関係遺跡平成19年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第136冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010
- 「京都第二外環状道路関係遺跡平成20年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第137冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010
- 「京都第二外環状道路関係遺跡平成21年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第142冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2011
- 「京都第二外環状道路関係遺跡平成20～22年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第145冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2011
- 「京都第二外環状道路関係遺跡平成21年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第148冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2012
- 「京都第二外環状道路関係遺跡平成20～22年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第149冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2012
- 「京都第二外環状道路関係遺跡平成21～23年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第150冊 (公財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2012

府道関係参考文献

- 「大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第133冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009
- 「長岡京跡右京第941次(7ANOOD-5・OIR-7・NNT-4地区)・友岡遺跡・伊賀寺遺跡発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第137冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010
- 「長岡京跡右京第968次(7ANRHK-8地区)発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第141冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2010

圖 版



(1) 調査前の状況(北西から)



(2) I トレンチ上層遺構(溝 S D01)全景(東から)



(1) 1 トレンチ上層遺構(溝 S D01)全景(南から)



(2) 1 トレンチ下層遺構(溝 S D02)全景(南から)



(1) 1 トレンチ下層遺構(溝 S D02)
全景(北から)



(2) 1 トレンチ溝 S D01 断面
(南西から)



(3) 2 トレンチ全景(南東から)



(1) 3トレンチ全景(南東から)



(2) 3トレンチ柱穴検出状況
(北西から)



(3) 3トレンチ溝 S D03 近景
(南西から)



(1) 3トレンチ溝 S D04近景
(北西から)



(2) 3トレンチ溝 S D03
断ち割り状況(南西から)



(3) 3トレンチ北西壁断ち割り状況
(南から)

